

続すみだ

ゆかりの人々



墨田区立あずま図書館

〒131 墨田区文花1丁目19番1号

TEL 612-6048・6072

はじめに

墨田区は、その長い歴史の中で文化人をはじめ数えきれない程多くの人々とかわりを持ち続けています。

「社会教育だより すみだ」では、区にゆかりのある人々を昭和56年から11年間にわたりご紹介してきました。そして、このたび、若干の加筆・訂正をして小冊子にまとめることができました。先に発行しました「すみだゆかりの人々」と併せてお読みいただければ幸いです。

また、執筆していただいた水谷五郎氏をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に感謝申し上げます。

平成4年3月

墨田区教育委員会

もくじ

樋口一葉……………	1	建部綾足……………	15
長谷川馬光……………	3	松倉米吉……………	17
川尻清潭……………	5	東條琴台……………	19
大矢市次郎……………	7	饗庭篁村……………	21
伊井蓉峰……………	9	村上浪六……………	23
亀田鵬齋……………	11	平田禿木……………	25
古今亭志ん生……………	13	吉川英治……………	27

古泉千樞	29	高田浪吉	45
荻野吟子	31	澤田正二郎	47
豊田正子	33	川口松太郎	49
大島蓼太	35	矢掛弓雄	51
元の木網	37	今井 栄	53
水間沾徳	39		
佐原鞠塙	41		
天 廣丸	43		

表紙は「東京吾妻橋ヨリ金龍山及ヒ向島眺望之図」

樋口 一葉

一葉——本名樋口夏子は、明治中期の閨秀作家として珠玉の名作を遺しながら、その余りに短すぎる生涯を閉じたことで惜しまれています。

一葉は、明治5年旧3月25日に麴町内幸町の東京府庁官舎で、樋口則義、滝の第4子として生まれ、奈津と命名されました。17歳の頃までは平凡ながら幸せに暮らしましたが、明治22年3月に父が事業に失敗し、7月には死亡という不幸が重なり、生活に苦しむようになります。この頃、一葉は小説を書くことで一家を支えようと決意したと思われます。

なお、一葉は11歳頃から和歌を学び、14歳の時に中島歌子の萩之舎に入門、万葉、古今に親しみました。13歳から24歳までに3、760首余りの和歌を詠んでいます。その中から隅田川を詠んだ歌を4首。

いましばし　しばしとみつゝ　更けにけり

すみ田川原の　夏の夜の月

角田河　つゝみの櫻　みかえれば

霞に成ぬ　春の夕暮

墨田川　うかぶかもめの　かげみえて

橋ばのさとは　暮そめにけり

すみた川　いく朝露に　ぬれつらん

櫻の色に　袖やそまると

一葉の短歌は小説ほどには評価されていないようですが、13、14歳の頃に詠んだ歌の中、何首かを歌人佐々木信綱が秀作として認めています。その中から1首。

春霞　花まつ山に　立ちなせそ

さかりの花の　かくれもぞする

一葉は日記も多く書き遺していますが、その中の「若葉かげ」と題する明治24年の日記は、それまでの日記と違って、初めて雅俗折衷文による日件録様式を確立し、以後の日記はすべてこの様式です。その4月11日の項、『花にあくがれ月にうかぶ折々のこゝろをかしきもまれにはあり。おもふこゝろはざらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば』と書き出し、やがて、『卯月十一日、吉田かとり子ぬしの澄田河の家に、花見の宴に招かるゝ日也。』とあり、途中略して続けられ



ば、『このほとりより車ものして角田河^{すみだかは}までは行きたり。枕^{ちり}ばしといふより車はかへしにき。散^{ちり}もはじめず、咲ものこらぬ花の匂ひいとこまやかに、遠くのぞめば只一むらの雲かと計うたがわれ、近くみ渡せば梢につもる雪かとのみ見ゆめる。まだ人け少なきほどゝて、花のかげを我がものにしてみありくほど、まこと小蝶に身をかへたらん心地ぞする。秋葉、しら髭のわたりよぎりて、梅若の塚までも花を探りき。このあたりに、人のかげもなきがいと嬉し。かへさには、長命寺の桜もちる求めて妹に渡しぬ。こは母君にまゐらせんとて也。おのれは三めぐりのほとりにて扶^{たもと}わかちぬ。かとり子ぬしの家は、その御社^{おやしう}のそがひに高くそびえたる三階がそれ也。——中略——今日は大学の君たちきそひ舟（第5回帝大春期競漕会）ものし給ふとて、

はや木ま木^{この}まにこぎいで給ふも折からいとうれし。——略——』

このように一葉は、向島の春を心ゆくまで楽しんだよう、翌年3月には、亀戸の臥龍梅^{がりようばい}から百花園と観梅をし、木母寺植半楼^{うへはんろう}で食事をしています。この頃は、彼女の作家生活の前期で習作時代ともいえましょう。

明治26年以後は、近代的自我に目覚め個性が確立し、29年11月に死去するまでの僅か1年半ほどの間に、「大つごもり」を始めとする傑作を次々に世に問うています。

酷しい批評で知られる鷗外の「たけくらべ」評。

『われは作者が補え来りたる原材料とその現し出したる詩趣とを較べ見て此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かする手段あるを知り得たり。われは、縦^{たとえ}令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人まことの詩人という称を送ることを惜まざるなり。』

当時、鷗外と共に文名の高かった幸田露伴も、一葉の作品を手放しに激賞したので、彼女の文壇における地位は不動のものとなりました。執筆依頼が相次ぎましたが、不幸にも病篤く、再び筆を執る日はきまませんでした。

一長谷川

馬光

霰あられふる 音にも世にも 聾傘つんばがさ

霰降る中をから傘をさして行くと、油紙をピンと張った傘だけに、霰がパラパラとうるさいほど音をたてるものです。霰というのは雹ひょうほど大粒ではありませんが、小粒で固いので、地面に落ちて音をたてるほどです。しかし、作者馬光は年をとって耳が遠くなったせいかさしてうるさくは聞こえず、役目をひいた身には、世の中でやいやい騒ぎたてることも同じように気にはならないといった意味の句です。晩年の馬光の生活ぶりがにじみ出ています。

馬光は、御家人長谷川直隆に養われ、元禄7年、8歳で直隆の跡目を継ぎ、小普請方150俵を受けています。その後、西丸御刀番まで栄進しましたが、延享4年(1747)に致仕しています。したがって霰の句は、その頃の作と思われます。川村順昭氏は、この句について次のように書いています。

『自然のありさまの中に、栄辱を捨てた身の気楽さのようなものを示し、淡々として生きることのしあわ

せを言ったもの。』

これは長寿になった現代人、特に金銭欲、物欲にまみれて罪を犯す人々の多くなった昨今、この句のような心境をかみしめてほしいと思うのは年寄りのひがみでしょうか。

さて、馬光の幼名は孫太郎、長じて半左衛門と改め藤原直行と称しました。父は津軽越中守の侍医で、須田宗人といえます。津軽屋敷は本所にありましたから恐らく馬光は、本所に生まれ育ったのではないかと思われまます。なお、馬光は貞享4年(1687)に生まれ、寛延4年(1751)65歳で歿しています。

はじめは白芹はつきんと号し、絢堂、素丸などともいいました。なお、俳諧の師は其日庵きじつあん山口素堂で、後に師の其日庵を継ぎ二世となりました。しかし、点者となつて門戸を張ることをせず、交友は広く各派にわたっていました。

享保の頃の江戸俳壇は、其角の末流と水間沾徳一派の人々が最も勢力をふるい、俳諧の宗匠そうしやうは点料をむさぼり、作者は点者である宗匠の好みに投じてよい評点をもらって喜ぶ傾向が強くなりました。したがって俳風は乱れ、宗匠による門閥の弊害も強くなりました。

た。このような状態を心配した馬光が、享保10年（1725）に中川宗端、松本珪林、大場蓼和、佐久間柳居と相謀って起こした俳壇革新運動が「五色墨運動」だといわれています。

さて、馬光は芭蕉の50回忌である寛保3年（1743）に、本所原庭の定林院という寺に芭蕉堂を建て、芭蕉と師の素堂の木像を安置しました。この木像は、大正地震の時に堂舎とともに焼失してしまいました。この定林院は、延享2年（1745）に芭蕉山桃青寺と名を変えています。これは芭蕉堂との関係だけではなく、芭蕉が初めて江戸出府当時、数年この寺に寄宿したからだといわれています。この寺は、現在も東駒形三丁目15番にあります。なお、小さいながらも馬光の墓も現存しています。

馬光は寛延3年（1750）に、文京区関口二丁目11番の龍隠庵（現・芭蕉庵）に芭蕉の短冊を埋め、「五月雨塚」を築いて芭蕉追慕の情を示しています。このあたりは神田上水の流域で、この上水工事に芭蕉もなんらかの形で携わったと伝えられています。馬光の頭にもそのことがあって、塚を築いたと思われます。

最後に馬光の句を4句。

のり搔かきの 腰の長さよ 夕日影

（註）のり搔とは、食べる海草ののりをかき集める漁師のこと。春の季語です。

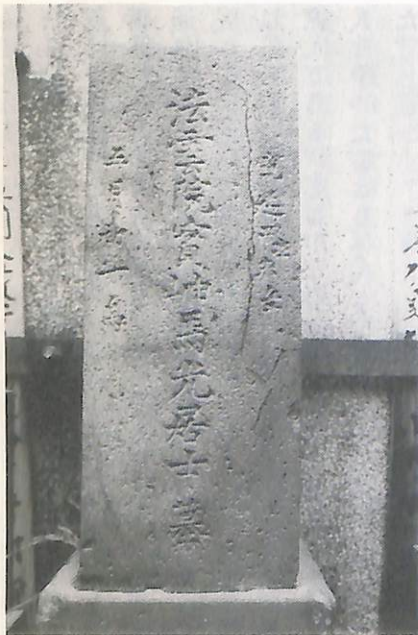
松杉の 上野を出れば 師走かな

江戸の頃の上野は、東照宮や寛永寺があって、松や杉がうっそうと茂った静寂な環境でした。そして、上野山を下れば、そこは賑やかな下町。嵐雪の37回忌に

或時の 言葉は枯れず 霜の墓

そして辞世の句

振りかへる 谷の戸もなし 郭公ほととぎす



墓碑（桃青寺）

川尻清潭

劇作家宇野信夫は、その著書「美しいことば」の中に川尻清潭のことを次のように書いています。

『私が川尻さんに初めてあったのは昭和九年の暮れであつた。同じ年に「吹雪峠」という一幕物を同人雑誌「劇と評論」に出したところ、十年正月の東京劇場で左団次（先代）が上演することになり、その舞台稽古の時、東劇で誰かに紹介されたのである。川尻さんは、その時も着流しであつた。（そういえば、川尻さんは一生洋服を着たことのない人であつた。）

神田伯山を柔らかくしたような人だという印象を受けたが、あとで聞くとところによると、川尻さんは若い時、それはそれは美男で気どりやで、ああしょっ中気どつていては、家へ帰ってさぞ気どり疲れがするだろうと言われたほどの人だったそうだけれども、私にはそんな人とも見えなかった。——略——』

また、安部豊は、「多技多能な人」という題で、清潭の思い出をこう書いています。

『芝居のことをよく知る人の少ない折から、川尻さ

んの死は実に惜しい。幼少から団菊などの旦那筋にあたる劇通の父に連れられて楽屋にも出入りし、各座の芝居を見続けたという人だけに、芝居のあらゆる面に精通し、其の存在の顕著であつたことは^{あまね}洽く知らるる通りであるが、私は「演劇画報」に関係してから、川尻さんに芝居の種々相を教わり、多くの俳優達に紹介してもらい、遊びの事まで指導を受けた、因縁の深い恩人である。応対が万事おだやかで、而も円転滑腕、人と争つたこともなく、人の悪口も云わない御仁であつた。

川尻さんは、「演劇画報」創刊の明治四十一年から社員となつて執筆され、口絵写真の選択や組付けをもち、写真版の地紋用の菊・桜・バラなど自分で描いて意匠を凝らしたり、又は勘亭流文字を書いてカットに用いたりして、演劇雑誌としての体裁を整えることに苦心を払った人である。——略——』

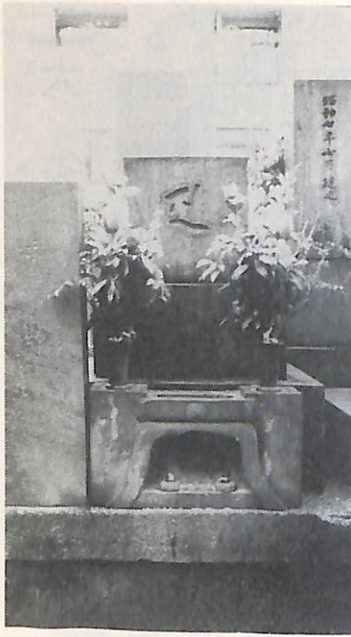
ここに引用させていただいたお二人の文で、清潭の人柄や仕事がある程度わかりいただけたと思います。が、もうひとつ、演劇評論家であり作家である戸板康二の文をご紹介しますよう。

『「楽屋風呂」「名優芸談」をはじめとする数多い著

書や第一次「歌舞伎」以来の永年の労作はもちろん川尻さんが好きで飛びこんだ芝居の世界における郷愁の歌であり、「吉野拾遺名歌營」の作者宝岑翁^{ほうしん}を父とする、歌舞伎をパトロネージする側からのいはば「優待券」で入って行った人へのみ許される理解の部分も多いと思ふが、何といっても川尻さんの私生活自体は歌舞伎座の監事室の仕事に四十年近くすごして来た公的な面よりも、余程僕には興味があるのである。

— 中 略 —

初対面の時、僕は大変固くなっていたが、川尻さんの態度は、その時も、その後もいつも変わらなかった。歌舞伎座の廊下や銀座で見る川尻さんは、戦争中も、今もちっとも変わっていない。——略——』



墓碑（源光寺）

川尻清潭は、明治9年に下谷二長町（現・台東区）の武野家に生まれましたが、故あって、川尻宝岑の養子となりました。宝岑は歌舞伎脚本作家として知られた人で、九世市川団十郎と親交があったといえます。こうした環境でしたから、清潭は若くして劇界に入り、歌舞伎の演出も数多く手がけ、また著書も多く遺しました。

昭和29年に78歳で歿し、その墓は本所三丁目の源光寺にあります。なお、江東小学校（現・両国小学校）に学んだことは判っていますが、少年時代どこで、どんな生活をしていたかは不明です。劇作家として、また演出家としても華々しく活躍した清潭も、晩年は太平洋戦争で歌舞伎座などの大劇場が閉鎖されてしまい、彼はひ肉の嘆をかこつのみで、わびしい日々を送ったようです。独身ですから、なお所不在な生活だったでしょう。

昭和30年の彼の一周忌に歌舞伎座によって建立された記念碑が墓側にあり、晩年に清潭が詠んだ『秋風やまはり舞台の 裏おもて』の俳句と久保田万太郎の『ひつきようは 老ひの気弱の 小春かな』の俳句とが刻まれています。

大矢市次郎

『明治二十七年二月十一日東京浅草に生まれ、昭和四十七年五月二十八日、七十八歳にて歿す。全生涯を新派演劇に捧げ、芸格高厳、気骨稜々、明治大正昭和を通じて最も偉秀なる大名優であった。その示したる演劇のすべては後進にとって永遠の教典である。』

北条秀司

右の文章は、向島の蓮華寺にある大矢市次郎の墓碑のかたわらに建てられた墓誌の全文です。北条秀司は劇作家で、その作品は新派でも上演されています。新潮文芸賞をはじめ、多くの賞を受けています。

大矢の生まれは浅草といっても、浅草須賀町、今の蔵前四丁目です。前の国技館のあった蔵前通りに面した桃太郎団子の裏の、道が三つ又になっているところにあった家で生まれたということです。しかし、街のたたずまいも今はすっかり変わり、土地の古老に尋ねてみましたが、覚えている人はいませんでした。

彼は東京生まれですが、父は万次郎といって、大阪心斎橋筋で手広くランプの卸問屋を営んでいました。

明治のその頃は、ランプの間屋といえは先端的な商売で、大変な繁昌ぶりでした。しかし、万次郎は大酒家で、酔えば大金を使い果すといった有様で、ついに破産してしまい、やむなく再起を期して東京へ出てきました。母親は市次郎を身ごもっていました。

こんな情況でしたから、さすがに東京では懸命に働きました。もともと商売にかけては才能がありましたから、ある程度繁昌するようになりました。そうなるに再び遊蕩児にかえってしまい、商売に失敗します。

こうした有様でしたから、彼の少年時代は常に貧乏との戦いでした。住まいも浅草観音堂裏の太子堂長屋に1円50銭の家賃で住みました。しかも7人兄弟の4番目という子だくさんの家ですから、その貧乏ぶりは大変なもので、彼の眼には貧乏と戦う母の姿が焼きついていました。それでも勉強好きの彼は、馬道の寺本学校（久保田万次郎の「大寺学校」のモデル）に通い勉強に励みました。

しかし、その好きな勉強も13歳で断念、知人の世話で真砂座の子役のエキストラになります。そこで貰う1円50銭の給金で、貧乏に苦しむ母親を少しでも助けることができるのが、何よりも彼の喜びでした。従っ

て日本橋中州の真砂座まで歩いて通いました。そんな彼が両国橋の袂から、ふと乗った一銭蒸気の中で真砂座の藤井六輔に偶然出会い、弟子入りを勧められます。藤井は伊井蓉峰一座の幹部俳優で、当時なかなかの人氣でした。その藤井に素質を認められたのですから、彼も嬉しくないはずがありません。しかも給金は2円くれるというのです。今よりもっと母親にお金をあげられる——まず彼が考えたのは、そのことです。名優大矢も、初めはお金ほしさで演劇界に足を踏み入れたのです。彼の著書「日々願うこと」の中でも、しみじ

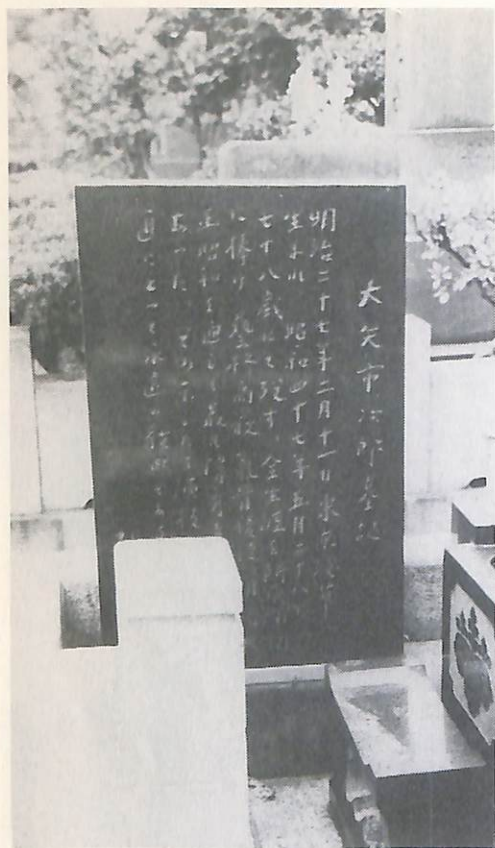
みとその頃を語っています。

六輔の弟子となった彼は、芸名を藤川宗六と師匠につけてもらい、演劇界に本格的に進むことになりました。その頃の彼は体格がよく、骨格もしっかりしていて、年よりは2つ、3つ上に見られていたのと、たとえエキストラでも一生懸命に仕事に打込む彼の姿が、藤井に見込みのある少年と映ったのかも知れません。

こうしてお金欲しさからの演劇界入りでしたが、天性の役者としての才能と、どんな些細なことでもおろそかにしない芸熱心とが、多くの先輩に認められていき新派演劇人として引立てられ、重んじられていきます。なかでも新派の重鎮伊井蓉峰には大変かわいがれ、厳しく指導を受け、彼自身も蓉峰に心服していました。

墓誌（蓮華寺）

やがて大矢は、新派に対する功労を認められ、紫綬褒章を受けることになりましたが、その祝いのための宴席などは一切固辞して受けず、ひたすら舞台に全力投入して、受章に対する感謝の気持としました。



一伊井蓉峰

先にご紹介した大矢市次郎が、向島の先生と呼んで尊敬していたのが伊井蓉峰です。蓉峰は、そのすぐれた容貌——平たく言えばとても美男子だったことから、良い容貌——伊井蓉峰という芸名になったといわれています。したがって、その当り役も「不如帰」の武男「金色夜叉」の貫一、「婦系図」の早瀬などすべて二枚目役です。

大矢は、その著「日々願うこと」の中にこう述べています。

『恩師伊井蓉峰が亡くなられたのが昭和七年の八月十五日。立秋すぎのたいそう暑い日で、涙と汗がぬぐう後からあふれこぼれて、この身をさらにやせ細らせた悲しい日であったが、奇しくもそれから十三年後の八月十五日は、日本人にとって忘れてはならぬ日となった。私は祥月命日はもとより、毎月の十五日には、東京にいる限り先生の墓参を欠かすことはなかった。これは心の定めのようになっていて、いつの頃からともなくお参りに行くというより、先生とお話をしに行く、

先生にお願いに行くという感情に変わっていった。

——略——』

さて伊井の本名は申三郎といい、明治4年日本橋に生まれた生粋の江戸っ子で、統御力のあるきつぷのいい人でした。医学予備校・独逸協会に学び、写真師だった父の歿後は、神戸三井銀行に勤めました。

明治24年、浅草鳥越の中村座に旗上げした川上音次郎一座に入りました。自由民権思想を鼓吹した「オペッケーペー節」を上演して大阪で人気を得、この年上京してこれまた大成功しました。しかし、いわゆる壮士芝居ですから、伊井の肌に合わなかったと見えて、すぐ退座してしまいました。それにしてもサラリーマンの彼が、何故俳優を志したかは不勉強で筆者にはよくわかりません。

伊井はやがて依田学海の後援をえて、男女合同改良演劇済美館を組織して、浅草公園の吾妻座で旗上げしました。

一座には優れた俳優がおり、芸術至上の写実主義を唱えて、依田学海や川尻宝岑の作品を上演しました。当時としては珍らしく女優を使ったことも、観客に新演劇らしさを印象づけました。とはいえ、反写実主義

の千歳米坂などの異分子もいて、演劇的にも、興行的にも、やがて行詰まってしまいます。

伊井を後援した学海は、元来は漢学者で政府の要職にもついた人ですが、趣味の広い人で、演劇には特に興味をもち、演劇改良運動に深くかわり、自らも新しい演劇のための脚本を書きました。

伊井は素人座長として吾妻座の興行には失敗したものの、新派演劇の道を求めて、多くの困難を打開していきます。

宇野信夫は、その著「むかしの空は美しく」にこう書いています。

『白ひげ橋はその頃木の橋で、橋銭をとった——中略——橋の上から見ると左手に日活の撮影所の屋根が見えた。——中略——撮影所の前には、竹藪や雑木に覆われた伊井蓉峰の荒れはてた家があった。あとで書いたことだが、伊井はその頃貧しくて、客に出す茶菓子にも事欠く有様だったそうだ。』

やがて、明治31、32年と歌舞伎座に進出できたこと

は大きな成功でした。そして、35年1月から11月まで、日本橋中州の真砂座に河合武雄を女房役として上演を続けました。この時、近松研究を唱えて、近松物8種を原作に忠実な演出で試み、演劇界の大きな話題となりました。その後、島崎藤村の「破戒」などの文芸物を上演し、演劇界に新風を吹込みました。その後、新派全体が衰えてきましたが、昭和6年に伊井、河合などによる新派大合同演劇の実現で、新派復活を思わせる中、翌7年伊井は惜しまれつつ61歳で病歿しました。



一亀田鵬齋

書は亀田 画は文晁に 狂歌おれ

芸者お松に 料理八百善

これは太田南畝が得意の狂歌に託して、当時の世評を詠んだものです。蛇足ながら、文晁は江戸時代の著名な絵師谷文晁のこと、八百善は浅草にある名代の料亭でご存知の方も多はいはず。

南畝は幕臣ですが、学者、文人としても傑出した業績を遺した人です。その南畝にこうまでいわせた鵬齋は、書家としても儒者としても世評の高かった人物です。彼は、当時草書の大家といわれた良寛和尚を越後に訪ねており、その影響を強く受けたといい、こんな江戸川柳があります。

鵬齋は 越後帰りて 字がくねり

彼の蚯蚓体（蚯蚓は、みみず）といわれる独特の書風は、他の追隨を許さないものでありました。もともと私などは悪筆で、子どもの頃「そんなみみずののたくったような字を書いて」と、先生によく叱られたものでした。同じみみずでも、鵬齋ともなると違う

んですね。

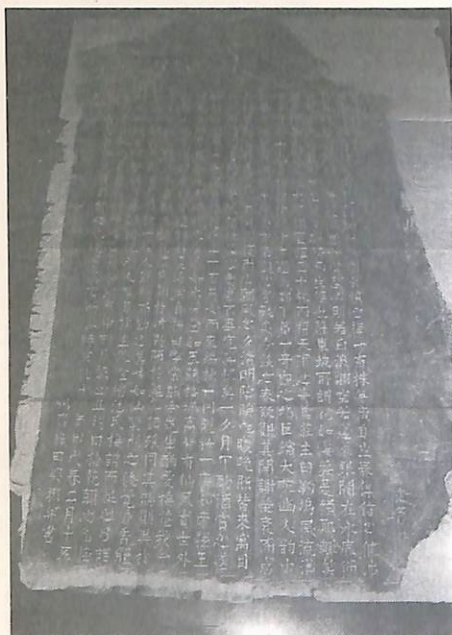
鵬齋は、宝暦2年（1752）神田弁慶橋（現・岩本二丁目あたり）に生まれました。父は日本橋馬喰町のべっ甲屋の通い番頭で、その晩年の子でした。母は出産後半年余りで亡くなり、彼にとっては幻の人でした。幼名は弥吉、通称は文左衛門、諱は長興（略して興とも）、名は翼、字は図南、後に興龍、あるいは樺龍ともいい、鵬齋とも善身堂とも号しました。

6歳で飯塚肥山に素読を、三井親和に書を学びました。親和は深川に住んでいたので、一般には深川親和と呼ばれた当代の書の大家であり、弓道にも馬術にも長じたなかなかの人物でした。その親和が入門してきた鵬齋の書を見て、その天分を高く評価したといいます。なお、区内千歳町にある古刹要津寺には、この親和の書を刻んだ芭蕉の「古池や」の句碑が現存しますが、なかなかすばらしいものです。

14歳、笠間侯の侍医井上金峨に師事しました。当時の医師にはすぐれた儒者がいましたが、勿論、金峨は後世に名を遺した大儒です。その彼が、鵬齋の学才を高く評価し、やがては自分を越えていくであろうと讃えました。

このようにその天分を高く評価され、将来を期待された彼も、老中松平定信の寛政の改革の一環として、寛政2年（1790）5月に出された異学の禁——朱子学以外の儒学はすべて認めないという禁止令のため、朱子学に反対する立場の鵬齋は苦境に陥りました。幕府の役人として登用され、出世するには朱子学を学ばなければだめということになると、1、000名余りもいたという彼の弟子も、みな彼のもとを去っていきましました。それでも自説をまげて朱子学に変わるような鵬齋では、勿論ありませんでした。

この鵬齋と墨田区とのゆかりですが、彼は本所横川



墨田梅莊記拓本（百花園）

出村に46歳の春から4年程住んでいました。また、墨田区の誇る向島百花園誕生に際しては、他の多くの文人墨客達と協力して大いに力を尽しています。なお、園内にある「墨田梅莊記」という石碑は、彼が文章を考え自ら書いたものを刻んだもので、百花園誕生の由来から、その眺めの素晴らしさをたたえたもので、まさに名碑の名に恥ません。

区内には木母寺にも「題隅田堤桜花」という彼の詩碑、隅田川神社には彼が碑文を撰した「無琴道人墓碑」があり、書は大窪詩仏ですが、これも名碑といわれています。その他、白鬚神社の「墨多三絶の碑」の碑陰の文も鵬齋が撰しています。

晩年の彼は、下谷金杉（現・根岸四丁目金曾木小学校付近）に居を定め、ここが終焉の地となります。文政9年（1826）75歳で亡くなりましたが、酒井抱一（詩人・画家）は、その著「軽挙館句藻」に次のように書いて、鵬齋の死を惜んでいます。

『鵬齋先生の一週忌に今戸村称福寺（現・台東区今戸二丁目所在）にまかりて

いかにせん 賢き人も なきあとは

今としもおなじ 花ぞ散りける

古今亭 志ん生

『世の中に「なめくじ」ほど、ズウズウしくて、ものに動じないやつはありませんナ。

あいつは刃物で切ろうが、キリでつこうが、ケロンとして、ちっともおどろかない。そればかりか、切ったって一滴の血も出やしない——略——』

これは、「なめくじ艦隊」という表題に「志ん生半生記」の副題をつけた彼の著書の巻頭の文です。普通なら「はじめに」とでも書くのを「まくら」としてあるのに興味をひかれ、一気に読み切りました。

教員という束縛の多い職業だった私にとっては、志ん生の生き方はなんとも自由奔放で、ただ驚くばかり、いや羨ましくさえ感じました。

彼の本名は、美濃部孝蔵というすごく堅そうな名前です。明治23年に神田亀住町（現・外神田五丁目）に生まれました。5人兄弟でしたがみな早死で、大酒家の彼だけが長寿とは、呑兵衛には何よりの味方でしょう。父、戌行は巡査という堅いはずの職業ですが、実際にには相当な道楽者でした。ところが、祖父は文京区

水道橋に居を構える旗本直参で、槍の指南番であったとか。そういえば、名人円朝も剣道達人の家柄の出でした。

志ん生は、下谷尋常小学校4年中退です。当時、小学校は4年まで、その上に高等科が4年ありましたが、一般には尋常科で終わりました。

彼は11歳で奉公に出されましたが、すぐ戻ってきてしまい、何度奉公先を変えても長くて1週間、大抵は3〜4日で帰ってくるといった風でした。あまりすぐ帰ってくるので、朝鮮京城の印刷会社奉公させられましたが、そこでもどうしてもいやだと頑張って、3日も4日も食事をとらない。預かった人間に、もしものことがあってはというので、ひとりで東京へ帰されたというのです。奉公で束縛されることが、たまらなくいやだったんでしょう。志ん生の人間性がよく出ているではありませんか。

さて、13、14歳頃には、もうバクチもうてば酒も飲む、遊びにもいくといった、いっぱしの道楽者になりましたが、そうした中で、いつしか噺家を志して努力するようになっていました。

20歳で二代目三遊亭小円朝に入門、三遊亭朝太の芸

名をもらいますが、28歳の時に金原亭馬生の一門に移り、金原亭馬太郎と改名、31歳真打に昇進、金原亭馬きんと改名します。翌年、清水りんと結婚します。このりんが蔭の力となって彼を支え、噺家として大成させ、子ども達を立派に育てあげています。

『寄席紳士録』（安藤鶴夫著）にこうも書いています。『さア、それから今日まで十六度も名を変えている。ひどいのは、また同じ芸名に三度も戻っている。

「どうしてこう貧乏と縁が切れねえのかなア、ええそうだ名を変えてやろう。そうすれア、少しやア縁起くそがよくなるかも知れねえ」

それにもうひとつ、

「こう借金取りがきちゃ寝てもいられねえじゃねえか。ええ、そうだ借金取りの目をくらすために名を変えちゃいッ」

これが十六回も名を変えた理由である。』

彼は住所もよく変えましたが、一番長く住んでいたのは墨田区業平一丁目です。なめくじがうようよいいるので、俗になめくじ長屋と呼ばれ、6畳と2畳の二間で家賃はタダ。それでも借手なし。そこに彼は昭和3年から8年間も住んでいました。彼の長男、清＝噺家

馬生（故人）はここで生まれました。貧乏で産婆のお礼も払えなかったという話も、ここでのこと。

貧乏に苦しみぬいた彼ですが、芸の方は豊かに伸びて、その一種独得な話芸と、長年の自由奔放な生活体験から出る多彩な話題とが、多くの人々を惹きつけ、魅了しました。他人が真似しようにも真似ることの出来ない芸……それが志ん生の芸だと讃える人もいます。

晩年は、芸術祭賞や紫綬褒章、勲四等瑞宝章を受けるなどの栄光にも恵まれ、83歳で静かに永眠、文京区の還国寺に葬られました。



一 建部綾足

向島の弘福寺には、綾足の句碑（高さ160cm・巾70cm）があります。彼は、安永3年（1774）妻と共に上毛地方（群馬県あたり）に片歌を広めるための旅の途中で発病し、江戸石町の仮寓に56歳で歿しました。そして弘福寺に葬られました。もっとも現在も墓はありませんが、昭和14年「建部凌岱建墓会」によってこの句碑が建てられており、裏面に歿年や法号「知足院即心是空居士」もあって、墓碑の意もありそうに思えます。碑の表には、次のように刻まれています。（現代表記にかえて）

『吉野山にて詠める』

波とのみ みふねの山の 山桜

綾足』

綾足は、享保4年（1719）弘前藩家老、津軽校尉政方の二男として生まれました。父は山鹿素行（大石内蔵助も師事）の高弟で、兵学儒学の造詣深く、母は兵法家大道寺友山の娘という優れた家系でしたが、不幸にも少年の頃に父を失います。しかし、11歳の頃

から文武両道に励み、やがて槍術無辺流の免許を得ており、同じ頃、俳諧にも強い関心を示します。

家柄にも才能にも恵まれた彼は、藩中きっての美少年としても人々の熱い視線を集めました。これが彼の人生出発の躰きとなるのは皮肉なことです。享保17年（1732）3月、兄監物は江戸詰となり、妻そねを国許に残していきます。翌年、母も妹をつれて出府、家には結婚して数年の若い嫂と少年の二人だけになりました。やがてそねは美少年の彼に熱い思いを寄せるようになります。

数年後、帰国した兄は、この事実を知って大いに苦悩します。封建時代ですから、不義者はただちに成敗せねばなりません。しかし、弟思いの彼はそれもならず、苦悩を重ねた末、元文3年（1738）2月に妻と離別し、弟を弘前から追放して決着をつけました。

その年の3月、彼は弘前を立退いて秋田にいきましたが、翌年4月には秋田を出立して京都に向いました。旅日記「笈の若葉」には、こう書いています。

『やよみ末の五日、久保田（秋田）を離る。是より北陸道は海を右にして、越路の中に月をも越えて、都にはつくことはるけきおもひながら、旅に行くものは

いづこにも心留めぬならひ、旅の具ひとつふたつ負いたれどいとかるし。戸田川と言うを渡りて、松の傍にやどる。今宵ぞ海の音におどろかされて夢もさだかならず。——略——

ふるさとを追われてゆく若者の気持ち、あわれにしみ出ている旅日記です。

やがて4月には入洛、知人の紹介で野坡に師事します。文献に残る最初の句。

ふたつ三つ 千鳥残して 寒さ哉

この頃、京の東福寺で剃髪しています。しかし、7月再び秋田へ下るなど漂泊の旅が始まります。そして23歳、江戸駒込の吉祥寺の学寮に入りました。これか



句碑（弘福寺）

らの彼は、仏道と俳諧修行のため転々とします。その故か、著書には旅日記も多くあります。

29歳の頃には吸露庵涼袋（後に涼袋と改める）と号し、伊勢派宗匠の地位を江戸俳壇に確立、経済的にも安定します。やがて兄と妹が相ついで世を去り、一人残された老母のために還俗しますが、母の勧めで宝暦3年（1753）に奥平侯に仕えました。そして翌年には主君の命で長崎に画の修行に赴き、清国人について山水画の技法を学び、画号を寒葉齋などと称してその道でも大いに才能を発揮し、画帖なども出していきます。長崎から帰ると故あって致仕し、浅草寺近くに庵を結びました。その後も何回か転居しています。

彼は宝暦13年に、国学者賀茂真淵の門人となっています。これは綾足の多彩な活動とあわせて考えると、大変興味あることで、彼が最後まで情熱を傾けた片歌再興運動も、こうした学習から始まったのではないかと私には考えられます。なお、片歌というのは上代の歌謡に見え、五七七の3句からなっています。綾足の片歌の一例。

おく山は 山鳩鳴きて 花もしづけき

多能多才な彼の業績の一端をご紹介します。

一松倉米吉

伊藤左千夫は、墨田区ゆかりの有名な歌人です。その左千夫に師事したのが古泉千樫です。米吉はその千樫の指導を受けながら、短歌の道に精進しました。

米吉が千樫を初めて訪ねたのは、大正2年10月です。その時のことを千樫は、こう書いています。

『僕が本所南二葉町に居る時分であつた。ある夜、前橋喜久男と二人で訪ねて来た。二人とも近所の鍍金工場に通つて居たのである。その時分、土岐哀果君が選をしていた文章世界に時々歌を投書して居たようである。その夜帰つてから二人連名で長い手紙をよこした。それからちよいちよい遊びに来るようになった。いつも、夜二人で一緒に来た。松倉君は十九歳、前橋君もその位であつたろう。松倉君は、すこし上目に物を見るあどけない容子、うつむき加減に物を言う前橋君の黒く澄んだ眼、二人ともまだ瑞々しい少年の面影があつた。』米吉は、新潟県糸魚川市（当時は町）に水車業を営む要吉、ツギの二男として明治28年12月に生まれましたが、4歳の時父を失っています。しか

も、10歳の時に親戚に預けられ、母親は上京して本所区北二葉町に住む日毛安之助と再婚しました。

やがて米吉は高等小学校を中退して上京、安之助方に身を寄せました。時に12歳。母ツギとしては遅ればせの連れ子という形になり、母子共に辛い立場であつたと思います。とにかく、彼は同じ町内の某メリヤス製造業に奉公しました。このあたりには戦前、町工場がたくさんあつたので、田舎から上京したばかりの彼が働くには好都合でした。

翌年、南二葉町のマルエム鍍金工場で働くことになり、最初に肺炎カタルになるまで8年間ほど勤めました。ここでの米吉は、ひたすら仕事に打込む模範工で、工場からしばしば賞与をもらつたといひ、短歌には、まだ目覚めていませんでした。

しかし、16歳の時、同じ工場で働く前橋喜久男、戸塚恒司を知り、回覧誌「青年文壇」を作りました。手書きのたった一冊のもので、どんな内容であつたかは、今は失われていて判りませんが、彼が文学的なものに目覚めたきっかけとなつたことは確かです。このことがあつて、初めに記したように小泉千樫を訪ね、その勧めもあつてアララギに入会しました。しかし、アラ

ラギに載るのは後のことで、大正元年3月に初めて5首が載りました。その中の1首。

吾の身の 吾がものならぬ はかな日の

一年とはなりぬ 日暮待ちし日の

高等小学中退——首席ではあったが、毎日の激しい労働の中で歌を詠むことは大変な努力が必要であつたろうし、そうした中での彼の歌は、異色なものがありました。しかも、大正3年には「生活と芸術」に投稿するなど作歌に熱中しましたが、翌年秋、肺炎カタルとなり、マルエムをやめる破目となります。養父は怠け者で、母ツギの内職で生活を支える仕末でした。

大正5年4月、米吉は咯血し、かねて望んでいた警察官志望をやむなくあきらめ、7月の徴兵検査も不合格となります。時代が大正ですから、兵役に服さないということは、社会的にも大きな負い目となります。こうした状態ではゆっくり休養することもできず、といつて病気の体ではどこも雇ってくれません。日毛の家に居辛く、大正5年5月、親戚筋に当る洗濯屋に住込みで奉公します。

身にそはぬ 印半纏しるはんてん 苦にしつつ

青葉垣根の もとを吾ゆく

7月には金属挽物業木村方に住込み奉公と、しきりと転職、病いと貧との戦いの中、生活は容易に安定しません。大正6年最愛の母に死なれ、精神的に打撃を受けます。もちろん、日毛家との縁は切れ、松倉姓に戻ります。

8年に同業の林方に転職、親方に人柄を見込まれて養子分として働き、二人娘の妹の婿に望まれましたが、姉の登美子と恋仲になります。しかし、せっかくの幸せの芽は育たず、その年の11月に咯血して、僅か23歳の生涯を閉じ、東上野の西光寺に葬られました。



東條琴台

東條琴台は、寛政7年（1795）6月7日、芝宇田川町（現・港区浜松町あたり）に町医者亨哲の三男として生まれました。幼名を義藏、名は信耕又は耕、通称を文左衛門といい、琴台と号し、他に無得志斎、吞海堂なども号しました。

幼い頃から読書を好み、父から四書五経（中国の古典）の指導を受け、15歳で亀田鵬齋、尾藤二州、山本北山など当時一流の学者について学び、その博覧強記ぶりは人々を感嘆させました。彼は多くの師の中でも特に鵬齋には長く師事し深く敬愛していたので、鵬齋の通称である文左衛門を自分の通称にしたといわれています。

23歳の時、岩村藩士平尾信従にその人物を見込まれて養子となり、娘、貞と結婚、一子録蔵（じゅうぞう）をもうけました。しかし、彼が折衷学派であったため君侯にうとまれ、養家に迷惑のかかることを恐れた彼は、自ら養家を去りました。妻は再婚せず、録蔵の養育に恵念しました。この録蔵の娘は、昭憲皇太后（明治天皇の皇

后）仕えて、その寵をえ、和歌の才のすぐれたところから名を歌子と賜われました。のちに結婚して下田姓を名乗り、学習院女子部長となった明治の女流教育家です。まさに祖父琴台のすぐれた資質の継承者ともいえるでしょう。



琴台は文政7年、29歳の時に林家の門弟となり昌平黌で講義するようになりましたが、文政10年には辞し、名君といわれた高田侯、榊原政令に招かれています。政令は山本北山の門

人であり、琴台も北山に学んだことがあります。

時代は進んで、鎖国日本の政治情勢も開国か、攘夷かで国論が激しく沸騰するようになりました。こうした時に琴台は「伊豆七島図考」を著わして、海岸警備の重要性を強く説き、当時余り知られていなかった小笠原諸島についてもしっかりとした見解を示しています。数年後、浦賀にペリーが来航したこと、そのペリーが

小笠原諸島に植民政府を樹立しようとしたことを考えると、彼の先見の明をひしと感ぜずにはいられません。しかし、この著書のため嘉永元年に幕府の譴責けんせきを受け、江戸の藩邸に幽閉の身となります。翌年幽閉をとかれ、主君高田政愛の命で越後の高田に住むことになり、政治の中心から遠ざけられます。国許では、もっぱら門弟の指導と著述に専念しました。高田にあること19年、明治維新の夜明けを迎えて琴台も明治元年9月、新政府に招かれて上京します。時に琴台73歳。この時の心境を詠んだ歌。

浮雲も 夜半のあらしに 吹き晴れて

高根さやかに いづる月かな

上京した琴台は、大学（旧昌平黌）で書を講ずることになりましたが、老体ということで間もなく暇を賜わり、多額の金を給せられました。

彼は再び高田へ帰り、著述に励むつもりでしたが、身の雑事にわずらわされることが多く、明治2年末に再び上京しました。

明治3年9月に宣教使出仕を命ぜられ、やがて宣教小博士に任ぜられました。（註・宣教使というのは神道に従う人の役職）明治の初めには廃仏毀釈というこ

とで、仏教は一時的に窮地に陥り、神道が高揚しました。国もそのことに非常に力を尽したので、神宮の地位が大いに高まりました。

琴台は明治5年、亀戸天神社の神官となり、権中講義という地位を与えられています。さらに7年には、80歳の高令で教部省に出仕、考證掛を命ぜられます。（教部省は明治5年に設置され、神道仏教による国民教化の事務を司る新しい役所です。）

翌年7月に盲目となって辞職、11年9月に浅草鳥越町の旧忍藩邸おしで大往生をとげ、谷中天眼寺に葬られました。大正10年、向島の蓮華寺に改葬されました。



墓碑（蓮華寺）

一 饗庭 篁村

饗庭篁村は、安政2年（1855）下谷区（現・台東区）竜泉寺町に生まれました。五男でしたが、夭折した三男に似ていたので與三郎と名付けられました。父、與之吉は近江国（滋賀県）の医家の育ちでしたが、文化年間に出府、日本橋に呉服屋を営み一代で財をなしました。母は安政大地震の時に圧死、生まれてまもない篁村は、近隣の竹村某に救われるという悲運にあいました。篁村と号したのも、自分を救ってくれた人の恩義を忘れぬためです。篁とは、竹林の意です。他に竹の屋主人、竜泉居士などと号しました。彼は慶応元年、11歳で新材木町の質商箱根屋に奉公に出されました。といっても、彼の家と箱根屋とは大変懇意だったので、奉公とは言いながら、実際は客分扱いで、いつも主人のそばにいて、ちょっとした雑用や走使いをするぐらいで、暇は十分ありました。したがって店裏の貸本屋で「水滸伝」「西遊記」などの和漢の雑書を多読しました。これが、彼が後年作家として、劇評家として活躍する栄養になりました。

この店の主人は、芝居、俳諧、遊芸（琴・三味線・踊り・小唄等）に興味をもった粹人で、彼はその影響も強く受けました。さらに主人は吉原にもしばしば遊び、そうした時にはいつもお伴をさせられました。勿論、少年の彼にとって遊女は別になんのかかわりもありませんが、廊のふんいきを見聞し、大人の世界をのぞき見たことは、ひとつの大きな人生勉強でした。

質店に奉公すること3年余りで実家にもどりましたが、父は亡くなりました。しかし、継母には愛され、彼も孝養をつくし、読書三昧の平穏な日々を送りました。明治7年、19歳で読売新聞社に入社、文選校正係となりました。

同9年に三世柳亭種彦と自称した高畠藍泉が読売記者となり、篁村は彼に文才を認められ、編集記者に登用されます。なお、初代柳亭種彦は、江戸後期戯作者として多くの著作があるので有名です。

同15年には、京橋南伝馬町に兄の好意で、小さいながら一戸を構えることができました。

篁村は、明治19年に「今様商人気質」を発表、本格的作家として力量を発揮し始めます。この年、坪内逍遙（小説家・劇作家・評論家）を根岸宅に訪問、意気

投合します。

逍遙は、篁村の元禄以後明治維新までの文芸に関する該博な蘊蓄と批判とに啓発されることの大変多いのを喜び、篁村は逍遙の外国文学の話に耳を傾けました。二人が生涯の親友として交際を続けたことは逍遙の日記にも書かれています。

明治22年、朝日新聞社に入社、月給100円と破格の待遇を受けます。彼は、この頃が小説家としての最盛期で、春陽堂から篁村小説集「叢竹」20巻が出版され、世間の注目を集めます。



やがて、江戸文学に関する評論、随筆が多くなります。また、歌舞伎劇評欄を担当し、竹の屋主人の号で劇評を書きました。また、逍遙に頼まれて、東京専門学校（早大前身）および「早稲田文学」誌上で、近松門左衛門について講義しています。

その劇評は、演劇に対する深い愛着と理解と高い見識を示す鋭いものでした。

さて、多くの文人がそうであるように、彼もしばしば居を移しています。たとえば、明治28年9月頃に向島小梅町に移り住み、明治43年頃まで向島に住んだのですが、その間にも数寄屋橋方面とか、同じ向島でも寺島村を転々としました。最後は明治43年の大洪水で向島をあきらめ、牛込区（現・新宿区）赤城下町へ転居、さらに大正6年には同じ牛込区東大久保に転じ、ここが詳しい住家となります。

篁村は愛酒家でした。逍遙をよく訪ねた頃も、それが昼であろうと、夕方であろうと、まず酒を勧めたと逍遙が日記に書いています。そうした生活のためか、糖尿と喘息に苦しみ、健康のため幾度か禁酒を誓って果さず、大正11年6月20日、68歳で歿し、染井墓地に葬られました。

一村上浪六

作家、村上浪六は波瀾にみちた一生を送りました。晩年に自分の一生をふりかえり、こう述べています。

『そもそも小説家となりしは、思軒居士その第一を過らしめ、春陽堂その第二を過らしめ、朝日新聞その第三を過らしむ。

されど、自己を責むれば、その第一は英雄の卵となりそこね、第二は念を官途に絶ち、第三は政治家となる道行に彷徨し、第四は実業家となる楷梯（楷段）を踏み外し、落魄窮境（おちぶれて苦しい境遇になる）の底に到りて已むを得ず筆を執りしもの。』

彼のこの述懐によると、小説とはあくまで当座の生活の糧であって、本業ではなかったと考えられますが、なかなか多作であつたし、稿料も当時売れっ子の尾崎紅葉の2倍もっていました。

この浪六は、慶応元年（1865）幕末天下騒然の時に大阪府堺に生まれました。幼名は、亀吉とも亀太郎ともいい、本名は信（まこと）です。父親は浪六が3歳の時に病死、母せいに育てられました。せいは豪農の娘で、

気性の激しい人でしたが、女学校で礼法と裁縫を教え、寄宿舎の舎監を勤める才能と見識を備えていました。

浪六少年は大変な腕白で、堺にあった6小学校のうち5校まで転校させられましたが、成績はいつでも、どこでもトップでした。

8歳の時、大阪東本願寺別院前の広場で10人余りの年長の子供等に包囲攻撃にあつたことがあります。木や竹の棒、石つぶてなどで向ってくる相手に、身に数ヶ所の傷を負いながらも一歩も退かず、むしろ逆襲して敵を追い散らしていたところを通りかかった中島健彦の眼にとまり、以後深く愛されるようになります。薩摩隼人で県令に次ぐ地位にある中島との出会いは、良くも悪くも、浪六の人生に大きく影響しました。

明治10年、浪六が上等小学校（高等小学校）在学の時、西南戦争が勃発し、西郷軍に馳せ参じた中島の口ききで、堺県令税所篤に引きとられました。

明治16年、元老院議官に栄転の税所篤に伴われて彼も上京します。この時、浪六は18歳の少年でした。永田町の工部大輔吉井友実の家に寄食することになり、ここでも勝海舟、大山巖などの明治維新の元老たちにその奇才を愛されました。こうした環境では、浪六少

年が、いたずらに志のみ大となり、地道な人生設計を見失う結果となったのもやむをえなかったかも知れません。英雄の卵となりそこねという彼自身の反省は、この辺を指しているのではないでしょうか。

やがて岡山県令に誘われて、破格の待遇で警察の雇となったり、吉井の世話で農商務省に入りましたが、どれも長続きせず、自分の進路を決めかねていました。

どこも待遇がよかったので、80円余という当時としては相当な大金を持った彼は、久し振りで大阪に帰ってそれを資本に投機を行いました。それがうまく当って、運よく1、100円余という大金を手に入れました。500円は母に送り、残りの金で若さにまかせて放埒な生活を送りました。当然、健康を害し、経済的にもどん底に陥りました。

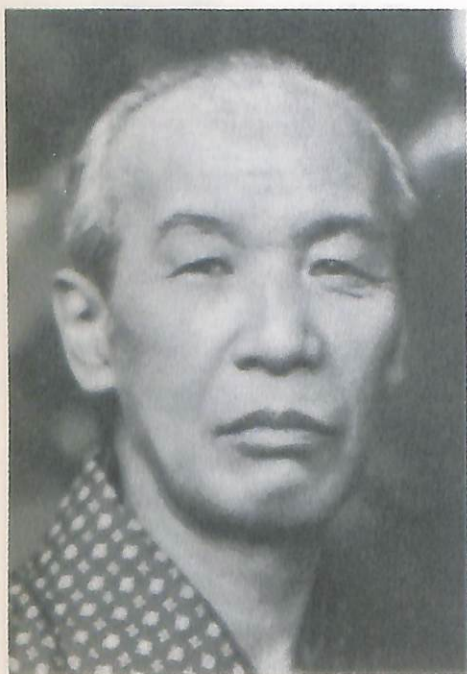
意を決して再び上京したのが23歳、色々苦勞しながら職を探すうちに、偶然就職できたのが郵便報知新聞社で、月給5円の校正係でした。

ここで編集長森田思軒に勧められると、書いたことのないのに簡単に引受けて書いた連載小説が「三日月」で、これが当たり、それが春陽堂から単行本として刊行されると大好評。それなのに報知新聞をあっさり退

社して、母の待つ堺に帰郷してしまいます。

しかし、堺では芽が出ず、翌年再び上京、朝日新聞社社長村山龍平と会見、色々曲折はありましたが、月給50円、作品は年2、3本、出社しないなどといった特別待遇で入社しました。そして8月には、東向島の白鬚神社付近に居を構え、母を呼び寄せ安定した生活に入りました。次々と発表する作品も当時は皆好評でした。

晩年は、太平洋戦争のため作家としては活躍できませんでしたが、昭和19年に下根岸の自宅で79年の生涯を終えました。



一平^{ひら}田^た禿^{とく}木^{ぼく}

禿木は雅号ですが、ちょっと変わっているのが、その由来に興味をひかれるままに、彼が書いた「雅号の由来」の一部分を次に載せました。

『——前略——翌朝は極楽寺の八重桜を賞し、由比ヶ浜へ出て、ぶらぶら江島へやって来た。恰度もう正午頃であったので、金亀楼へ立ち寄って昼食をすることにした。あの楼上から右手を望むと、まだ葉もない櫟の大樹が枝を張って聳えてゐ、その枝蔭には遙か彼方に逗子、鎌倉の長汀曲浦が連なちようていきよくはって、青い海には白帆が点々としてゐるのであった。さうした華やかな背景があった為か、その櫟の禿樹（葉のない樹）の姿何とも捨て難く、かねてうろ覚えの禿木無心無語禪の一句を想い出し、即座に禿木と命名したのであった。あの背景を想い浮べて慰めてゐた。——略——』

禿木は、明治6年2月に日本橋区伊勢町（現・中央区本町一丁目）に出生。本名喜一郎（通称喜一）と名付けられました。伊勢町は昔住んでいた三浦安針（我

が国に最初にきたイギリス人、家康に仕えた）に因んで、安針町とも呼ばれる富裕な問屋街で、魚河岸にも近く、下町らしい活気のある町でした。父、喜十郎はその町で荒物問屋（舶来の染料・工業薬品）を営んでいました。

禿木は未熟児だったので、武州大宮に住む叔父永田莊作に引取られ、自然環境に恵まれた中に育ちました。永田家は旧家で、門前には老松の並木、屋敷裏にはうっ蒼とした森があったそうです。叔父は儒者植村蘆洲（区内の蓮華寺に墓碑あり）に漢詩を学んだこともある人だけに蔵書も多く、彼は自然に書物に親しむようになりしました。叔父は彼のために、特に東京から教師を招いて国学や数学を学ばせるなど、彼の教育に心を砕きました。しかし、叔母が死亡すると叔父は再婚、やがて子どもが生まれるなどあって、彼は父のもとに帰りました。

しかし、父も死亡、家運は傾くといった有様でした。それでも、11歳の秋には神田共立学校に入学しました。同期には馬場胡蝶（英文学者）などがいました。

17歳で第一高等学校に入学しましたが、その年の6月、星野天知を主筆に「女学生」が創刊され、禿木も

島崎藤村や北村透谷と一緒に編集に加わりました。それまでの禿木は、叔父の影響もあって政治家志望でしたが、文学志望へ急傾斜、吉田兼好（徒然草の著者）の人生観に深い共感を覚え、「文学界」に「吉田兼好」を発表します。

幼時から築地居留地の外人宅に出入りし、英語をかなり理解できた彼は、学校でも英語力は抜群でしたが、数学は全く不得手で、明治28年に一高を退学、同年4月、新設の東京高等師範学校の専修科に入学しました。そうした中で、翻訳や評論、随筆などに筆をふるいましたが、明治29年に失恋、5年間ほど文筆活動を一切絶つといった激しい一面も持っていました。

なお、31年から3年間、高等師範付属中学校で教えたり、34年には東京高等師範学校で教鞭をとりました。この頃、文筆活動を再開、神田小川町に新居を構え、母と住みました。ここには多くの文化人たちが訪れたようです。また、彼自身も、雑誌「太陽」や「明星」など、当時もてはやされた総合雑誌や文芸雑誌に執筆、上田敏や森鷗外とも仕事上の関係をもつなど、彼の最も華やかな時代であったといえます。

36年には、文部省留学生としてオックスフォード大

に学び、39年帰国、高等師範学校教授となりました。しかし、1年ほどでやめ、その後、京都の三高など数校で教えますが、いずれも短期間でやめます。教師には不向きのようなのでした。温厚で、物柔らかさそうでありながら、案外気むずかしい一面があったのでしょうか。34歳で結婚、翌年1女を遣して妻に死なれ、3年後、その妹と再婚し、1男6女があります。

彼の中心的業績は、現代英文学の紹介で、「エミアソン全集」5巻など多くの著書があります。なお、彼が樋口一葉について随筆を書いていることを書きそえます。

昭和18年3月、70歳で歿し、両国の回向院に葬られました。



墓碑（回向院）

吉川英治

吉川英治の自筆年譜によると、彼は明治25年8月、神奈川県久良岐郡中村根岸（現・横浜市中区）に生まれました。本名は英次といひます。

父、直広は小田原藩下士でしたが、明治維新で職を失い、色々事業を企てましたがどれも失敗。その上、大酒と豪遊癖がやまず、一家は貧乏のどん底にあえぐ仕末でした。もっとも、7歳の頃は小学校に学ぶ一方、放課後は教室に残って、特別に英語の個人教授を受けたり、帰宅後、岡鴻東の「岡塾」で漢学を学んだり、日曜学校に通ったりして、場所柄外国人の友も多くできましたといひます。

なお、英治は5歳の頃から巖谷小波のお伽ばなしの本を喜んで見始め、10歳の時は、学友と謄写刷りの「詩文」を出して配ったり、雑誌「少年」に作文を投稿して当選するなど、文才の芽を感じられました。

しかし、11歳の秋には家運が急速に傾いて、退学して、印刻店に住込みの小僧にやられるという状態で、彼の苦難の時代が始まります。そうした境遇でも、14

歳の時、高島米峰主宰「学生文壇」2号に小説「浮寝鳥」が初当選したり、川柳や俳句にも強く惹かれて、多くの秀作を遺しています。生活はいよいよ苦しくなり、17歳の頃には、一家食せざる日ありとも書いています。

18歳の年末、苦学を志して上京し、墨田区菊川町のラセン釘工場の工員宿舎にはいりました。

いろいろ曲折をへて、20歳の時、横浜から一家をあけて上京し、本所緑町ガード下に1軒借りて住むようになりました。さらに一家は番場町（今の東駒形）に2階借りして移り、母は毎日吉原の某楼へお針さんに通うという生活でした。

やがて、27歳から2年ほど向島の寺島へ転居し、この頃から生活はどうやら安定に向ひます。

やがて29歳で東京毎夕新聞に入社、翌年には社命で夕刊に「親鸞記」を連載、これが初めての新聞小説であり、しかも大好評でした。

翌年関東大震災で新聞社は焼けてしまい、解散となりました。やむなく、上野の山で葎簀張りの牛飯屋をやって生活をたてました。こうした誰もが経験したこともない大災害の中で、様々な境遇と人間の心に出会

い、文学の業に深い意義を感じ、北信濃の角間温泉に籠って、思索と読書の生活に日々を送りました。

こうして内面的に充実してくると、せっせと原稿を書き始め、講談社の「面白倶楽部」に次々に連載されて好評を博しました。やがて他誌からも続々依頼されるようになり、作家として立つ自信を深めました。

大正14年、「キング」創刊号に初めて吉川英治の筆名で「剣難女難」を発表、以後昭和37年、70歳で亡くなるまで、数々の名作を遺しました。その間、昭和28年には第1回菊池寛賞を、30年には朝日文化賞を受賞し、35年には文化勲章を受章しています。受賞の日、初めて紋付を着用、懐中には文子夫人が差入れた母いの写真。

菊匂ふ 母の写真も 笑めるかに 英治

英治が晩年多くの名作を執筆した青梅市（旧・吉野村）の旧宅は「吉川英治記念館」として公開され、吉川文学を愛する多くの人々が訪れています。

最後に、石原四丁目のN.T.T墨田構内に建てられている慰霊碑をご紹介します。昭和20年3月10日の東京大空襲の時に、職場を守って殉職した3人の男子職員と28名の女子交換手、さらに大正の大震災の時に殉職

した2名も合わせて慰霊するものです。吉川英治自筆の文章が刻まれています。

慰霊碑の除幕式には自身出席して、

『春秋の歩み 文化の進展は その早さ その恩恵に馴る、^{まま}儘つい吾人をして 過去の尊いものを忘れしむる——』で始まる、切々とした思いのこもる碑文を朗読しました。英治の養女園子さんも、浅草隅田公園のそばの家で空襲にあい、行方不明になっており、英治は隅田川兩岸を捜し歩いたといえますから、胸中を思うと肅然となります。



一古泉千樫

千樫は明治19年、千葉県安房郡吉尾村の中流農家の長男として生まれ、本名は幾太郎です。吉尾村は、現在鴨川市ですが、当時は川沿いのゆるやかな傾斜地の山村でした。

千樫は頭の良い、どちらかというと早熟な少年で、12歳頃には短歌に興味を持ち、歌を作っていました。13歳の時、新聞「万朝報」の歌壇に投稿を始めたといえます。

14歳、吉尾村高等小学校を優秀な成績で卒業し、同校の代用教員に採用されました。大変に若い先生でしたが、村人の評判はとても良かったようです。なお、読書好きだったので、俸給はすべて本代に消えています。いました。こうした彼を弟はこんな風に書いています。

『——夜中、兄の方を見れば必ず机に凭り、書を繙いて居た。夜を徹するなどは珍しくなく——中略——学校の往復には必ず書店に立寄り、見れば買ふ、読んでは買ふ、新刊の書籍が出れば買ふ——略——』

15歳、教員講習所の試験に合格して入所、準指導の

資格を得ました。師範学校入学を希望していたのですが、年齢が足りず受験資格がありませんでした。彼は学校が大好きで、普通より1年早く小学校に入学していたのです。

準指導になったので、安房郡田原村竹平小学校に奉職することになりました。

一方、短歌に対する情熱は高まるばかりで、早くから「万葉集」の研究を始めるとともに、短歌誌「心の花」に投稿もしました。

18歳の時、「馬酔木」に「耕余漫吟」20首を投稿、伊藤左千夫の激賞を得、遂に教職を離れて歌人として立つことを決意します。

やがて21歳の5月、左千夫を訪ねるために上京します。故郷から山路はるばる保田まで歩き、そこから海路、東京霊岸島へ到着しました。昔、東京湾汽船はここから発着したのです。その時の歌から2首。

大川口 夕みち潮の かげふかく

ひかりふくれて うねりやまずも

たかだかと 鉄橋見えて みやこべの

大川の口に 船つきにけり

こうして茅場町の左千夫宅を訪ねた時のことを、次

のように書いています。

『先生にはじめてお目にかかったのは、明治四十年の五月であった。それまでも毎年一度ぐらいは上京したのであるが、田舎者のはにかみやであったわたくしは、よう訪ねて行けなかったのである。お目にかかって見れば、ただ親父に逢うた気持であった。先生のお宅へ幾晩も泊めて貰った。——略——』

この時の歎びの歌2首。

むらぎもの 心うれしも この庵いおに

われは宿りて 朝あけにけり

よき人に ともなわれつつ 亀井戸の

藤なみの花 われ見つるかも



この対面を左千夫は、どう受けとめたのでしょうか。彼の「勾玉日記」の一節に、こう記されています。

『しながどり安房とし言へば海につつめる小さき国とのみ思へるを、古泉千樫は其安房にも山深く住めりとか、いと山人さびて内海の舟にも酔ひぬとて訪はれつ。文取り交して交はりはや久しけれど、相みるぞけふぞはじめてなる。三日三夜を打語りて、猶詞残る心地しぬ——略——』

千樫は翌年教職を辞して上京、本所緑町に下宿して左千夫に師事。10月「アララギ」創刊にあたり、左千夫の手伝いもし、左千夫死後は、彼がしばらく編集にあたりました。住居も本所区緑町、南二葉町などに大正4年まで7年間ほど住みました。

一方、「心の花」の選者石樽いしづ氏の尽力で帝国水難救済会に就職し、生活の基盤も一応はできた彼は、念願の道にひたすら精進しました。若く、情熱的であった彼は、恋愛問題などで悩むこともありましたが、当時の著名な歌人達とめぐり会ったことで、多くを学びました。若き歌人として注目された彼も病のため、惜くも41歳で歿しました。自選歌集「川のほとり」が生前の唯一の出版物でした。

荻野吟子

日本の女医第1号である荻野吟子は、嘉永4年（1851）武蔵国俵瀬村（現・埼玉県妻沼町）に荻野綾三郎、嘉与の五女として生まれ、ぎんと名付けられました。後に自ら吟子と名乗りました。荻野家は代々名主で、村人に信望厚い旧家でした。

その頃、江戸で名高い学者寺門静軒が妻沼村に私塾「両宣塾」を開いたことを綾三郎は知り、長男保坪に名主にふさわしい教養を身につけさせようと考えました。また、組頭などの村役達や若者にも学問が必要と考え、仕事の関係で塾に通うことが困難な情況から、自宅を開放して出張講義を依頼しました。10歳のぎんは、少女らしい好奇心から若者達にまじって、この講義の席に出席してみましたが、やがて講義そのものに興味をもって熱心に聴講するようになり、その利発さは感嘆するほどでした。

やがて、隣村の大龍寺に「行余書院」という寺小屋が開設されると、向学心に燃えるぎんは、早速入門して基礎学問からしっかり勉強を始めました。

眼千両といわれる美貌とすぐれた才能は世間の評判となり、川上村（現・熊谷市）の稲村貫一郎の嫁に望まれました。貫一郎は、19歳で父に代って名主となった好青年です。ぎん18歳の春にめでたく結婚、仲むつまじく幸せに暮らしましたが、不幸にも婦人病となり、僅か1年で実家で療養する身となりました。この時、ぎんは自分はどう子どもは生めまいと考え、世継ぎを重視する時代ですから、離婚を望まない夫を説得して協議離婚しました。

実家での療養もさして効がないので、当時有名な下谷練堀町の順天堂病院に入院しました。しかし、医師はすべて男性であるこの時代に、婦人科の病気で診察を受けることは、旧家の育ちであるぎんにとっては耐え難いことでした。この体験がぎんに女医になろうと堅く決意させたと思われます。

こうして1年ほど入院、全治して明治5年2月末に退院して実家に帰ると、まず両宣塾に通い漢方医学の書をあさって勉強しました。明治初年のこの時代では、医学に限らず女性が学問をすることは大変な困難があり、ましてや医学においてはなおさらです。

明治6年4月、父死去の悲しみの中にも女医になる

決意を兄に打明け、上京しました。しかし、女性を受理してくれるような医学校はなく、私塾に学んだり、8年秋には東京女子師範学校に入学して基礎学力を強化することになりました。この入学の時、自ら吟子と署名し、以後これを用いています。

やがて女子師範の永井教授の紹介で、石黒軍医監の助力をえて、私立好寿学院に初の女子医学生として入学を許されました。それは明治12年でした。そして、明治15年、抜群の成績で卒業するとすぐ東京府に医業



開業試験受験の願書を提出しましたが却下され、翌春再び提出しましたが却下、秋には地元ならと埼玉県に、さらに内務省にも出しましたが、いずれも規則にない却下されます。

しかし、却下されても、却下されても願書を提出する吟子の熱意が認められてか、明治17年に規則改正、吟子等4名の女性が受験し吟子だけが合格、翌年の後期試験にも合格、ここに女医第1号となりました。

最初に「産婦人科荻野医院」の看板を掲げたのは、本郷湯島三組町で、当時の新聞雑誌はこぞって、この歴史的意義ある女医開業を報道しました。

やがて三組町では手ぜまになり、翌年には下谷西黒門町の広い家に移転しなければなりませんでした。

この後、吟子はキリスト教に入信、単に医療だけでなく、社会的にも有意義な活動をしました。そして若く優秀な牧師、志方之善と結ばれ、彼が活動する北海道に渡り、医師として活動します。

北海道で夫に死別した吟子は、晩年には向島区新小梅町（現・向島一丁目）に医院を開業して、地域医療に尽しました。住むこと5年、大正2年5月、病氣のため、63歳で波瀾の生涯を閉じました。

豊田正子

貧しいブリキ職の娘であつた豊田正子が一躍有名になつたのは、大木顕一郎、清水幸治編著の「綴方教室」が単行本として昭和12年7月に中央公論社から出版されてからでした。勿論、正子が葛飾区立本田小学校4年生の時に大木先生が担任となり、綴方の指導に力を注ぎ、正子の才能がそれによって啓発され、追々すばらしい綴方を書くようになったこと、そしてそれが雑誌「赤い鳥」にしばしば掲載されるようになったことで、正子は関係者に注目されるようになっていきました。なお「赤い鳥」は、大正7年から昭和11年にかけて鈴木三重吉が主宰して、その児童文学の理想を实践した機関誌で、日本の児童文学のレベルアップに大いに貢献しました。

「綴方教室」が単行本としてその価値を世に問うた時、幼い正子の曇りない眼で何のてらいもなく書かれ、生活のありのままを生のごとく表現したこの綴方集は、多くの人々の共感と賞讃を集めました。私などもまだ青年教師として担任児童の指導に熱中していた時

代ですから、この文集には強く心を惹かれました。

さらに「綴方教室」が昭和13年3月、築地小劇場で上演されたり、同じ年の7月に東宝で映画化されたりして、大きな反響を呼びました。正子に扮する高峰秀子の姿が、私には今も生々しく思い出されます。

川端康成はこう述べています。

『——前略——豊田正子氏の「綴方教室」の面白さは、この子供の性格や境遇によるところも少なくない。しかし私達を最も教えてくれるものは、その文学的才能の稀有な現れ方にある。子供がこのような文章を書けるのは、あたりまえのことである一方、実に不思議なことを考えられるのである。この少女の作品は作文の最もやさしい教科書であり、同時に最もむずかしい教科書である。いわば文学の原型、または出発点を見事に示したものであろう。そのような意味で厳然として神聖である——略——』

文豪川端から、このように高い評価をえたところに豊田正子の才能の輝きを感じます。

この正子の生まれた所は、牛島神社近くの米屋の2階でした。貧しかったので、両親は2階借りをしていたようです。出生は大正11年11月13日です。彼女の書

いた「大木先生の思ひ出」の一節。

『葛飾区の四つ木小学校で尋常科三年を終了した時、地域の関係で私達生徒の一部は隣接の本田小学校に移ることになった。私にとっては三度目の転校である。昭和四年向島の小学校に入学した頃、世間にはまだ好景気の余波が残っていた。——略——（筆者註・向島の校名は、私が豊田さんにお聞きしたところ、忘れたということでした。区内京島にお住いの金井さんのご教示で、第三寺島小と推定を改めました。）』

やがて区画整理で寺島の曳舟川通りに転居、父由五郎は店を持ち「ブリキ職銅由」の看板を掲げた。正子にとっては、一番嬉しい子供時代で、こんな風に書いています。

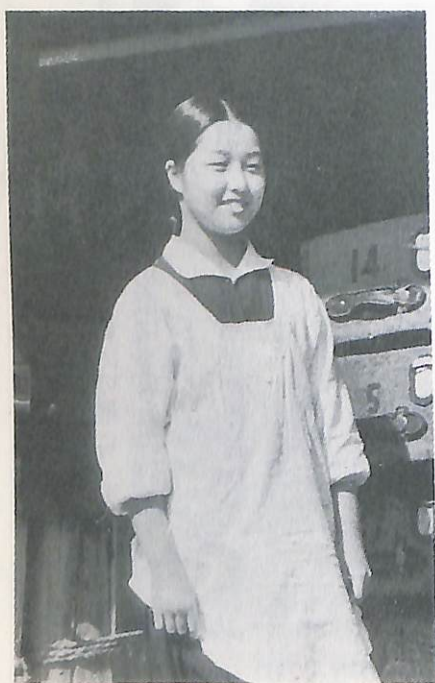
『「これさへ上げりやあ、豊田由五郎も男になったってもんさ。もう明日死んだって惜しくねえ。」

父は印半纏しるはんてんの肩をひくつかせて喜んだ。縄で縛った銀色の眩しいトタン板。壁に並べた鰻うなぎ、柳葉、折臺等、一人前のブリキヤの店が板についた頃、世間にはそろそろ不景気の風が吹き始めて来た。数カ月、活々してゐた店は除々にさびれた。——略——』

こうして正子一家は、貧しい生活に苦しみます。こ

の時代の貧乏といったら、とても今の人たちには想像もつかないようなひどいものでした。そうした貧しく苦しい生活をしっかりと見据えて、正子は飽くことなく綴方を書き続けていました。その鋭く、純な物の見方、考え方が、読む人の心を深く捉えて離しませんでした。やがて、母の破倫によって起った家庭内悲劇を鋭く捉えた最初の長編小説「芽ばえ」なども手がけるようになり、その文学的領域はますます広がりと深まりを加えました。

なお、豊田正子氏は、今は国立市の方にお住いで、ご健在とうけたまわります。（現在は入院中）



大島蓼太

墨田区千歳二丁目にある要津寺を訪ねると、寺門を入ってすぐ右手の植込みに立派な石碑が数基あるのが眼をひきます。一番門に近い花崗岩の角石の石碑は、正面に「芭蕉翁俳塚」、裏には『みかの月 弓矢とともに すてし身を云々』と刻まれた銘文があり、最後に「雪中庵蓼太」とあります。芭蕉を敬慕する蓼太の心情が偲ばれる石碑です。芭蕉歿後70年の宝暦13年（1763）に建てられたものです。

さらにこの碑の奥には『碑に 華百とせの 葛植む』という蓼太の句碑があり、裏側には（ほんとうはこちらが表か？）「芭蕉翁百回忌発句塚碑」という篆額の下に、芭蕉をたたえ、芭蕉を敬慕する蓼太が、自身が病身のために芭蕉の百回忌に自分がかかわることのできないのを恐れて、天明2年（1782）4月に10年余りも実際の百回忌よりも早く供養を行い、さらに追福の会を開いたことなどのいきさつを刻んであります。選文は澤謙伯です。

なお、蓼太は、この碑を建てた5年後の天明7年

（1787）9月に亡くなっています。

大島蓼太の本姓は吉川、名は陽喬、通称は平助、または平八といいました。蓼太の他に、蓼太郎、宣来などとも号しました。信濃生まれといいますが、木曾ともいい、江戸ともいい、どうもはっきりしません。若い頃家を出て、御用縫物師を勤めたといえます。

俳諧は桜井吏登に学びました。吏登は服部嵐雪の弟子で、雪中庵二世となりました。嵐雪は芭蕉門下で、其角と並び称されるすぐれた俳人で、雪中庵を名乗りました。この後、嵐雪門下で一門をひきいる者は雪中庵を名乗ることになり、蓼太は寛延3年（1750）に師の吏登から三世雪中庵を名乗ることを許されました。

芭蕉の「奥の細道」の跡をたどったり、上方を巡って修業をつむなどして、江戸俳壇に動かぬ地位を築くようになりました。そのことは、彼が芭蕉百回忌の句会を主催したり、記念碑を建てたということにも、彼の江戸俳壇での力のほどを示しているともいえます。著書なども多く、また人間的にも円満で社交的で、一部では上流におもねるものとして、非難する者もありました。しかし上流の邸にも多く出入りしたので、一部では上流におもねるものとして、非難する者もありました。しかし、門人3、000人といわれる

ほど繁栄したともいいます。その俳風も「炭俵」風の
平明なものであったといえます。「炭俵」は勿論、芭
蕉の代表的句集の一つです。

境内には天明7年に建てられた蓼太の墓があります。
自然石を四角な台石の上に置き、正面に「雪上加霜」



とだけ刻まれ、水さしに「雪碑」とあります。雪中庵
三世として栄えた蓼太の墓としては質素すぎると思
えますが、俳人らしい自然な姿とも思えます。それだ
けにこれは供養墓だとする説も肯けますが、ではほん
とうの墓は……という私には不勉強でわかりません。



句碑（要津寺）

一元の木網

ことわざに「故の木阿弥」ということばがあります。一度はうまくいったようでも、再びもとの状態にもどってしまふことをいいます。

別の説では、一度は素性（家がら・育ち）に似つかぬほどの栄華を得た者が失敗して、元の素寒貧にもどることをいっております。素寒貧なんて今はあまり使われないことばですが、ごく貧しいことをいいます。

ことわざの起りは、大和郡山の城主であった筒井順昭が病死する時、その子順慶がまだ幼かったので、隣国から攻め込まれるのを恐れて、自分の声とよく似た声の木阿弥という盲人を身代りに使って存命を装ったが、幼主が長ずると、木阿弥を元の盲目の芸人の身にもどしたことからでたといえます。

このちょっと自嘲的なことわざは私もよく使い、耳にもしたことばですが、これをもじって、元の木網と号した狂歌師が金子正雄です。通称は喜三郎といい、享保9年（1724）武州松山に生まれました。成人して江戸に出て、京橋北紺屋町（現・中央区京橋三丁

目あたり）の湯屋、大野屋を継ぎ、姓を渡辺と改めました。（一書には、鈴木とも）

後に西久保神谷町（現・港区）に隠居して、多くの弟子に狂歌を教えました。天明元年（1781）58歳の春のことです。彼は町人ながら独学で国文、和歌の研究を進め、さらに高崇谷に絵を学び、嵩松と号しました。さらに天明3年には、狂歌作法の指導書「浜のきさご」を出しています。

当時世評の高かった幕臣に太田南畝がいます。学者として、はたまた詩人として天下に知られたばかりでなく、狂歌、戯作にも大いに才能を発揮しました。木網はこの南畝などとも交際を深め、狂歌師としての地位を築き上げました。その著書は、寛政6年（1794）「新古今狂歌集」、同10年狂歌作法書「言葉のもとすえ」、文化元年（1804）俳諧作法書「饒舌録」など数多くあります。

作品2首

元日

又ひとつ 年はよるとも 玉手箱

あけてうれしき 今朝の初春

雪中酒宴



歌碑（隅田川神社）

盃の 手もとへよるの 雪の酒

つもるつもると いひながらのむ

さて、木網は発心して遊行上人の法弟となつて殊阿弥と改め、それから関西方面を遊歴したり、吉野に仮住まいをして一とせの春を過したこともありましたが、後、江戸に戻り、剃髪して向島水神の森に閑居して、念仏と狂歌三昧の生活であつたとか。

当時のことを記念して、弟子たちが文化3年（1806）に建てた歌碑が、隅田川神社境内にあります。

碑文の読みは、次のとおりです。

『天明はじめの歳、卯月十日まり四日の日（註・1781年4月14日）、年頃の本意遂げて、角田河のほとり水神の森にて、かしらおろし侍りてよめる俳諧

木阿弥

きようよりも 衣は染つ 隅田川

流れわたりに 世をわたらばや

』

木網が住んだ頃の隅田川神社のあたりは水神の森とか、浮島などと呼ばれて樹木がこんもり茂り、洪水の心配も少ない、とても閑静な所だったといえます。彼は住まいを落栗庵と呼び、弟子を教えました。なお、彼は文化8年（1811）6月28日、88歳でこの地に病歿、江東区の正覚寺に葬られました。辞世の歌は、八十余り 見はてぬ夢の 覚るか

思ふもうつつ 暁の空

なお、木網の妻もなかなかの狂歌師で、智恵内子と号し、多くの弟子がありました。内子は、無い子を内侍（宮廷の女官）にかけたことばです。

初恋 智恵内子

ただひと目 見しは初瀬の 山おろし

それからぞつと ひきし恋風

（註）一説に木網は浅草寺近くの庵で死んだとも。

水間 沾 徳

墨田区ゆかりの俳人というところ、まず芭蕉とか、其角、嵐雪、一茶と数えあげる人々が多く、水間沾徳についてはあまり知られていないようです。ところが、沾徳は墨田区にゆかりの深い赤穂義士と俳諧の道で強い師弟関係にあり、しかも、その墓は、太平一丁目にある名利法恩寺の塔中、陽蓮院の墓地に現存しています。墓石には「本妙院沾徳日到居士」と法名が刻まれています。その横に同じ大きさで「智清院妙浄日徳靈尼」と刻まれている法名は、沾徳夫人のものではないかと私は推定しています。いずれにしても墓石そのものは新しく建てかえられたものです。

沾徳は寛文2年（1662）江戸に生まれました。通称は次郎左衛門、字は友兼といい、研刀師（刀をとぐ人）であったといわれていますが、確かなことはわかっていません。なお、姓をはじめは門田であったともいわれています。

俳諧を志して福田露言に入門、沾葉と号しました。後に内藤露沾門にかわり、沾徳と号しました。露沾と

いう人は、明暦元年（1655）に磐城藩主内藤左京太夫の二男として江戸藩邸に生まれ、俳人として才能を発揮した人で、沾徳は重くみられていました。

沾徳31歳の時に「一字幽蘭集」を編集して出版、これが好評で、これから江戸俳壇に登場し、享保期俳壇の中心的存在となっていました。この書物は、性、心、情、その他1字の題99を掲げて、それに因む句を一括配列し、時に漢詩、和漢などの出典を句のかたわらに記しています。巻末には沾徳立句の歌仙と露沾立句の百韻各一卷があり、また貞門、談林、蕉門の各時代にわたり、知名俳人の句多数が組みこまれています。

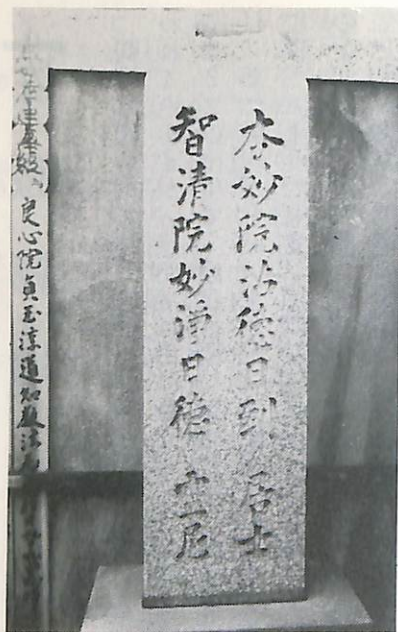
沾徳には他にも多くの著書がありますが、その中に「沾徳随筆」という享保3年（1718）出版の俳話の本があります。この中に赤穂浪士討入りに際し、大高源吾の子葉が沾徳の多年の恩情を謝し、おんしやく恩借の布団をそのまま打ち捨てゆくことについての詫状、子葉などの7年忌に対する手向けてむけの言葉、林大学頭りんだくの義士に対する挽詩（死者をいたむ詩）を記録しており、沾徳と子葉達との師弟の暖かい心の交流が感じられます。

なお駄足ながら恩借の布団というのは、沾徳の情けによってかしてもらった布団ということです。どうい

ういきさつがあつたかは分りませんが、布団を貸すとか、借りるとかするのは、相当に親密な関係にあつたように思えます。

沾徳が元禄14年京都滞在中に出版したという「文蓬菜」^{ふみよも}には、子葉は勿論、神崎与五郎の竹平、富森助右衛門の春帆、茅野三平の涓泉^{けんせん}などの句ものつています。

なお、沾徳が浪士達に対して、どんな影響を与えたかはわかりませんし、子葉たちがいつから沾徳に入門したかも、私には不明です。しかし、子葉が「丁丑紀行」という俳諧紀行の書を元禄10年に出していることはわかっています。その年の9月に江戸を出立、東



墓碑（法恩寺）

海道を赤穂に帰るまでの紀行で、一日一章となつていきます。その句の中の1句。

手拭に 桔梗をしぼれ 水の色

最後に沾徳の句を掲げましょう。享保3年の作。

岩を飛ぶ 美人は愛宕 ほととぎす

（句意）美人が甲斐々々しいかっこうで、岩を飛んで愛宕山を登っていく姿はまるでホトトギスのようだ。愛宕山は京都の西の名山として、東の比叡山と対置される。山上に火伏の神、愛宕神社を祭っています。

次は元禄7年の作

帯程に 川も流れて 汐干かな

新味のある句です。

次は享保3年の作

低き方へ 水のあわつや はつ嵐

（註）あわつ——あわだつの意、「粟津」——

近江八景のひとつにかける。比喻としやれの句。談林風で知的、都会的な比喻俳諧を身上とする彼の俳風を示しています。

一 佐 原 鞠 塙

鞠塙は仙台の人で、それも農民出身ではないかといわれていますが、定かではありません。宝暦12年（1762）の出生で、姓は佐原、名は秋芳、通称を喜久七、また平八ともいました。天明年間（1781、88）に江戸に出て、江戸三座のひとつである中村座の芝居茶屋、和泉屋に男衆として雇われました。通称を平蔵に改め、10年の間しっかりと働き、お金を貯めました。芝居茶屋で働くのは、なかなか収入が良いのですが、派手な世界ですから、普通ではなかなかお金を貯めるのは困難だと言われています。鞠塙はそうした世界にあっても、自分の目的を貫き通す意志の強さをもっていたと思われます。

彼は貯めたお金で、まず日本橋住吉町で骨董店を開き、北野屋平兵衛と改名しました。元来、商才もあれば世才にもたけ、芝居茶屋以来のひいき筋も多かったのです、大いに繁昌しました。彼は、単に人に使われて一生を終わるような人物ではなかったようです。

彼は文事にも通じ、書画骨董に対する鑑識眼が優れ

ていることから、多くの文人墨客の愛顧も受けました。時は幕府最後の文化文政の頃、文化が華開き多くの文人墨客を輩出した時代ですから、鞠塙にとっては大変恵まれた時代であったわけです。

しかし、好事魔多しとか。ちょっとした商売上の躓きから、隠居せねばならぬ身となり、本所中ノ郷にひそみ、菊屋宇兵衛と名を改め、さらに剃髪して鞠塙と号しました。

やがて多賀屋敷跡3、000坪を購入して、梅園を開くことに決めました。この時、彼は桜を植えれば多くの人が集まるが、花期をすぎれば誰もこなくなる。しかし、梅なら花を楽しみむだけでなく、多くの実を得て、生活の資とすることができると考えて、愛顧を受けた文人墨客に梅樹1本ずつの寄付を乞うたところ、忽ち360本余りが集まったといえます。これが百花園誕生の起源と考えられます。なお、このあたりは梅樹の成長によいところで、あちらこちらに有名な梅樹があったり、梅園がありました。

百花園のあるあたりは、今でこそ区の北に片寄り、位置的には余りよい場所とは申せません。明治末から大正にかけて百花園存続の危機が訪れました。それは

洪水、震災、戦災などの災害によるところが大きかったのですが、その位置が都心から離れすぎていて、訪れるのに不便だったことも一因となりました。しかし、開園の頃は、墨東地区では一番早く陸地となり、繁昌した所でした。蓮華寺、法泉寺、さらには白鬚神社のような古い由緒ある社寺が創建された所なのです。したがって、そこに百花園を創始した鞠塙の考えは正しかったのです。

しかも、百花園創始となると、当代一流の文人、墨客が、その造園に進んで尽力しました。

たとえば、その名付け親は酒井抱一（画人・俳人）であり、蜀山人が「花屋敷」の3字を題すれば、詩仏が門の左右の柱に『春夏秋冬花不断 東西南北客争来』の聯をかけ、千蔭は『お茶をきこしめせ、梅干もさむらふぞ』の掛行灯をかかげるなど、誰が創始者か判らぬほど文人墨客は百花園開園に力を尽しました。

国指定「名勝及び史跡」となり、現在は都が管理していますが、昔ながらの掛行灯を掲げて茶店を営んでいるのは、鞠塙の子孫である佐原氏です。鞠塙の心を今に伝えているのは、意義深いことです。

鞠塙は百花園創始の他に、墨堤の桜の補植にも力を

尽しました。隅田公園にある「墨堤植桜之碑」にそのことが刻まれています。さらに彼の造園技術も相当なもので、文政初年には、本郷の阿部備後守の下屋敷の造園にかかわったという記録があります。

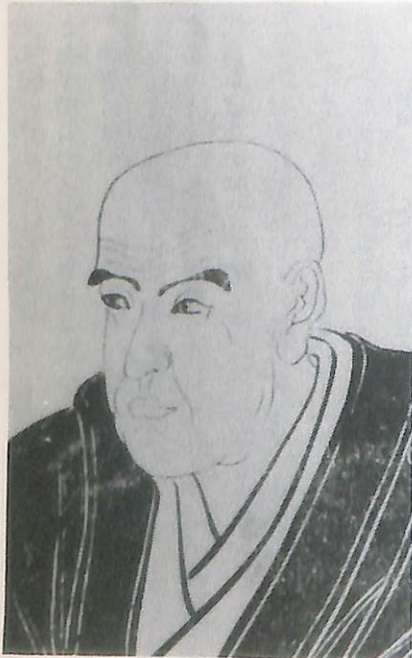
彼は多くの著作があり、「群芳譜」「墨水遊覧誌」など、名著といえるものが数多くあります。

彼は天保2年（1831）8月、70歳の生涯を閉じました。現在は蓮華寺に葬られています。

辞世の歌

隅田川 梅のもとにて われ死なば

春咲く花の こやしともなれ



一 あめの
天

ひろ
廣 丸 まる

東向島の白鬚神社に左の写真のような、ちょっと変わった石碑があります。高さ78cmの自然石の小さな狂歌碑ですが、碑の上方には酒徳利らしい形、その下には狂歌が刻まれています。

くむ酒は 是風流の まなこ 眼なり

月を見るにも 花を見るにも



狂歌碑（白鬚神社）

とあり、中央で下方に天廣丸とも刻まれています。もつとも、廣丸の2字は現在では読みとれません。碑裏には、

『宝曆六 鎌倉出生 別号醉亀亭』

とあります。なお、宝暦6年は紀元1756年で、九代將軍家重の時代です。

廣丸は青年時代に江戸に出て来て、本所石原町に住みました。もつとも、石原のどのあたりで、いつ頃まで住んだかということはよく判りません。

晩年は、四谷（新宿区）に住んだとい
います。彼は当時有名な狂歌師であった
唐衣橋洲（幕臣）を師として狂歌を学
んだので、橋洲が四谷に住んでいたこと
や、師を中心とする四谷連との関係もあつ
て、四谷に住むようになったのでしょう。
なお、狂歌師としても有名な太田南畝
（別号を蜀山人・四方赤良）も牛込（新
宿区）に住むなど牛込、四谷あたりには
多くの狂歌の連がありました。

廣丸は鎌倉今泉の生まれで本姓は磯崎
広吉です。その地にある白山神社参道入

口の左側に、白鬚神社と同じように「くむ酒は」の碑が建てられています。文字の配列こそ違え、書風はそっくりで、廣丸の自筆であろうと言われています。しかも、高さも同じくらいの自然石です。建碑は文化年中と刻まれています。白鬚神社の方は建碑年は刻まれていません。廣丸の数多くの狂歌の中でも名吟として知られる「くむ酒は」の狂歌碑が、出生地と活躍の地と両方にあることは、大変興味あることだと思います。

廣丸は、酔亀亭とも称したくらいですから、大麥お酒が好きだったようです。「鎌倉文学碑めぐり」と題した鹿児島達雄図書館長の研究によると、廣丸は外出する時も徳利を放さず、衣服に徳利紋をつけていたり、墓碑や位牌、著書などにも徳利の図をつけていたとあります。

現在も今泉には、廣丸の子孫にあたる磯崎家がありますが、今泉の山腹の磯崎家墓地にあるという彼の墓は、荒れはてて確認することができず、僅かに宝暦の宝らしき字のある小さな墓石がありました。家人にもそれが彼の墓とはいきれないようでした。

酒にまつわる彼の奇行には、こんな例もあります。酒をあまり飲むために家の手入れができず、雨の日に

自宅で開いた狂歌の会の時、傘をさしながら会を続けたともいわれています。

さて、廣丸の著書は「狂歌千歳の松葉」「狂歌都鳥集」「狂歌玉笛集」「狂歌三百集」など数多くありますが、わけても酒好きの廣丸にふさわしい「狂歌酒白首」は特に広く愛読されたといえます。石碑に刻まれている「くむ酒は」の狂歌も、その狂歌集の巻頭の第一首です。なお、廣丸は易学を井田龜学に学んだ高名な易学者でもありました。

廣丸は、文政11年（1828）江戸に歿しました。なお、港区六本木三丁目の善学寺には、彼の墓碑というのか、記念碑というのか、白鬚神社の狂歌碑と同じ系統の緑色の自然石を使った石碑があります。

表面に『天廣丸』

裏には、『心あらば 手向けて呉よ 酒と水

銭の有る人 銭の無き人

酔亀亭』

を3行に刻んであると研究書には書かれています。現在、この石碑の位置が背後の崖に近すぎて、私には確認できませんでした。お寺さんの方にも、そうした記録はなさそうでした。

一高田浪吉

墨田区ゆかりのすぐれた歌人に伊藤左千夫、その弟子古泉千樫、そのまた弟子の松倉米吉の3人を挙げる事ができます。高田浪吉は同じアラギ派ですが、左千夫とは師弟関係はありません。しかし、浪吉は本所区番場町（現・本所一丁目）に生まれ育ち、明徳小（廃校）卒業という根っからの墨田っ子の歌人です。

「我が歌の遍歴」という彼の著書を読んで、その歌は勿論、その人柄に強く心を惹かれました。まさに彼こそ墨田区ゆかりの歌人であると感じました。

浪吉の父は下駄塗職人です。今は珍しくなりましたが漆塗りの下駄を作る仕事で、何人かの職人を使っていたいました。

彼は長男ですが、幼い時に重い病気をしたため、小学校卒業後すぐに父に弟子入りしました。強情で、父親に踏んまえられたり、母親に灸をすえられたこともあると自ら書いています。しかし、2人の弟、5人の妹に対しては優しい兄であったようです。

父の店には奉公人が何人かいましたが、中に父の弟

の金七がいました。彼の叔父なわけですが、父は自分を親方と呼ばせ、浪吉は金公と呼んでいました。

この金公は小説「不如帰」など新小説を愛読、同じ奉公人である作蔵という青年は通信教育に関心を持ち、講義録を取寄せて英語を習ったり、雑誌に投稿したりしていました。こうした雰囲気刺激されてか、浪吉も文章講義録とか、中学講義録などの通信教育に参加して勉強を始めました。

同時に「新小説」という文芸誌も愛読し、子規などの主張する写生文にも大いに興味を持ちました。さらに、たった月2回の休日には、隅田川べりの雑草の茂る空地で、眼をみはり、耳をそばだてて、景色、物音、小鳥の声などを手帳に書きつけたこともあると、彼は書いています。

やがて、「文章世界」などの雑誌へ小品文、短歌、俳句などを投稿し、入選、入賞するようにもなり、賞品の図書券で、加藤千蔭（江戸時代の国学者・歌人——回向院に墓）の「万葉集略解」を買ったりしました。小卒程度の学力では、かなり難解なはずですが、後年、頼まれて万葉集の講義をするほどに勉強しています。

初入選句（内藤鳴雪選）

秋風に 猫の眼細う 光りけり

雑誌の読者欄で、近くの北二葉町に住む松倉米吉を知り、突然訪問して意気投合、職工と職人、働く者の作る歌という点と、写生を重んずる点とで共通しましたが、立場の相異から意見は必ずしも一致しませんでした。松倉にすすめられてアララギに入会しましたが、これが浪吉の歌人としての道を方向づけ、彼が終生師と仰ぎ、尊敬した島木赤彦との出会いのきっかけとなります。

彼が赤彦を小石川区（現・文京区）上富坂の家に初めて訪問したのが20歳の時で、以来赤彦が大正14年に



歿するまで歌については勿論、私生活についても指導援助を受け、歌人として成長していきます。

赤彦が臨終の時に下諏訪に訪ねて、次のように詠んでいます。師を尊敬し、慕う彼の気持ちの現われとして

師の君は 顔をうちあげ 笑ひ給ふ

やつれたまひし その面わはや

大正12年関東大震災で家は焼け、母と妹2人をいっぺんに失うという非運に見舞われました。焼跡で、

妻や子に 似たる姿と 思へばか

父は手づから 水をそそぎぬ

この頃、渋谷のアララギ発行所に寝泊りして、夜は校正や雑務、昼は父が焼跡に建てたバラックに仕事に通いました。

昭和5年に高女教諭の妻と結婚。3人の子持ちとなりますが、戦争への道をひた走るこの時代に歌人として生きることは大変なこと、渋谷区若木町の家を空襲で焼かれ、妻子を青梅に疎開させましたが、昭和21年には妻を失います。しかし、昭和37年に64歳で歿するまでに多くの歌集を遺し、短歌に対する情熱を失いませんでした。

澤田正二郎

「すみだ史談会々報」に宮原秋男氏が寄せられた小文で、澤田正二郎が墨田区ゆかりの人であることを私は初めて知り、自分の不勉強をはずかしく思いました。さっそく彼が書いた本などを何冊か読みましたが、どれもそれにはふれていません。ただ「苦闘の跡」という標題の彼の著書に、子どもが牛島小学校（現在は廃校）に通っていたことが書いてありました。緑図書館長の小島氏の話では、長命寺に近い向島五丁目あたりに住んでいたのではないかということでした。

新派の大矢市次郎や伊井蓉峰が墨田区ゆかりの人であることはすでに書きましたが、これに澤田が加われれば、明治から大正、昭和にかけて発展した新しい演劇に大きな足跡を残した有名な俳優が、墨田区に3人も揃います。また、大正初期に白鬚橋際に日本初のグラス・ステージが日活によって造られたことから当時墨田区は文化的先進地だったといえます。

さて、澤田正二郎は一般に澤正と呼ばれて親しまれていたのです、私も澤正と呼ばせてもらいます。

澤正は、明治25年に滋賀県大津に澤田正弘（県収税長）の二男として生まれました。しかし、27年に父が死亡、母に連れられて上京、根岸の実家に住みましたが、故あって下谷御徒町へ移りました。

当時は7歳で小学校へ入学するのが普通でしたが、どういうわけか6歳で下谷小学校に入学しました。幼時は大変な腕白坊主で、そのため餓鬼大将にいじめられることもありましたが、親や先生に訴えることはなく、その内に逆に相手をやってしまうことさえあり、餓鬼大将になる機会もありましたが、何故かなろうとはしませんでした。成績は兄や姉に比べてパツとせず、親からも軽く扱われました。しかし、4年生の時に全国小学校児童の展覧会に彼が柳の絵を出品したところ、昭憲皇太后のお眼にその絵がとまり、献上ということになりました。これで、彼の評価は大いに変わりましたが、本人は相変わらずでした。

12歳で神田淡路町の開成中学にピリで合格、軍人志望でしたが近視のため断念、猛烈に読書に励み、人生及び社会に対する認識の芽を伸ばしました。

中学5年の時に浅草で「小松龍三一座」の新派劇を魅せられます。一方、一高受験に失敗、その上脚氣

となって、自棄的になり、吉原遊廓で日を過したり、劇場巡りをして日をつぶすなどの自堕落な生活に落ちこんでしまった彼も、思いついて「世の中」という5幕7場の脚本を書き上げ、新派の伊井に見せました。しかし、忙しいからとすげなく断られます。ところが、当時一流といわれた劇作家小山内薫に見せたところ、快く眼を通して、種々助言まで得、その後勧められて早大文科入学を決意します。

入学後、春季大会の余興に坪内逍遙作の「桐一葉」^{はとときす}「沓手鳥孤城落月」が学生たちによって上演されました。彼は一葉の前と石川伊豆守との二役早替りを演じて大好評。総長からねぎらいの言葉さえかけられ、演



劇人としてのスタートをきりました。

彼は在学中に島村抱月の芸術座などに関係して新劇運動に身を投じましたが、新劇のあり方にあきたらず新国劇を組織、大正6年新富座で旗上げしました。しかし、興行的に失敗し、11人の座員とともに都落ち、京都や大阪で苦闘を続けます。その間に独特の剣劇を創始して大衆の人気を得て大正10年に再び上京、明治座で菊地寛の「父帰る」、行友李風の「国定忠治」などを上演します。その剣劇の特異性もあって、澤正の名は天下に響きました。

その翌年の秋には浅草六区の公園劇場に進出、大衆劇団としての地歩を確立する一方で、関東大震災以後は赤坂演技座、丸の内邦楽座、新橋演舞場、帝劇にも出演。売物とする独特の剣をふるうかたわら、純然たる創作戯曲もとり上げ、そのモットーとする「演劇半歩主義」はようやく具体化し、歌舞伎と新派劇の間をゆく国民劇の創造に成功します。

こうして彼のいづく演劇理念が着実に実現し、その前途は洋々たるものがありました。しかし、昭和4年3月4日、風邪が原因の急性中耳炎のため、上演中に不幸にも病歿、僅か36歳という若さでした。

川口松太郎

明治32年、浅草今戸に生まれた川口松太郎は、父は左官職人で、10歳の時に丁稚奉公に出されましたが、間もなく復学して、とにかく小学校だけは卒業しました。しかし、卒業するとすぐ奉公に出されました。質屋の小僧、古本の露店商、象潟警察署（現・浅草署）の給仕などさまざまに職を変えながらも、少年時代から自活の道を歩みました。なお、彼は自分が私生児であることを小学3年生の時に、ふとしたことから知りました。当時は、私生児であることだけで不当に差別された時代でありましたが、そのことのために道を踏みはずすことはありませんでした。

17歳の時、同じ浅草生まれの著名な作家、久保田万太郎に師事、ここに彼は文学の道を歩むことになりました。この頃「流罪人藤助」を「講談雑誌」に発表、当時としては多額の稿料7円余を手に入れました。

20歳の時、深川に住む講釈師悟道軒円玉の許に住込み、江戸文芸と漢詩を学びました。彼の話術が巧みなのは、円玉の影響が大きいとみられています。このあ

たり、彼は大変な苦労を重ねたようで、自伝的小説「人情馬鹿物語」にくわしく語られています。

さて、浅草生まれの川口松太郎を墨田区ゆかりの人として、私がどうしてもご紹介したくなった理由の一つは、彼が大変な相撲愛好者だったからです。彼は「人生悔いばかり」の一節「私の履歴書」の中にこう書いています。

『下町育ちの特徴の一つに角力好きがあった。本所深川は地元だから当然だが、両国の国技館が始まると町廻りの触れ太鼓が今戸へも来た。あの太鼓を聞くと今でも胸がわくわくする。両国の国技館へは長年通ったものだ。初めて通ったころは、常陸山と梅ヶ谷の全盛時代（註・2人とも名横綱として有名）——中略——

その当時の私は、まだ子供なので、三階と称する国技館の屋根裏で見たが、木戸銭は確か八銭だった。上から見おろすと、土俵の上の横綱が豆のようにしか見えない。その頃から身の軽かった私は、見廻りの目を盗んで土俵下へ忍んで行き、見物人の後に隠れて見物した。』

もう一つの理由は、彼が向島をよく理解していること、こよなく隅田川を愛しているからです。彼が書いた

た小説「しぐれ茶屋おりく」を読むと、彼が向島に抱く親愛の情というか、愛着の心というか、とにかくしみじみとしたものを感じるからです。たとえば、こんな風にも書いています。

『おりくの店の「しぐれ茶屋」は寺島村の一部の、大川沿いの芦の中にある。向島の土手は枕橋から言問橋までが一直線の川沿いになっているが、言問団子の前を右折して、長命寺の角を左へ曲ると、あとはおだやかな田圃の中で左手は沼地の中の芦原つづきだ。その頃の土手は土塁を盛り上げたように高く築かれ、幹



の太い桜樹が両側に並んで、花どきの美しさはもとより、花の散ったあとの葉桜もすがすがしく、四季おりおりの眺めにそれぞれの変化があった。花の盛りに花見客が浮かれるのは、枕橋から言問までの川沿いで、土手の片側には葭簀^{よしず}がけの茶店が出て、店の名を書き込んだ花のれんを川風にひるがえして客を呼ぶ。』

昔の向島を知る方にとっては、何ともなつかしい文章で、この「しぐれ茶屋おりく」という小説にたまらない愛着を感じられると思います。なお、この小説は「吉川英治文学賞」を受賞しています。さらに、小説「鶴八鶴次郎」を発表、菊地寛に激賞され、第1回「直木賞」を受賞しています。

松太郎は、『自分の作品が後世に残るとは思っていない。又、残したいとも思わぬ。現世に多くの知己を得て、現世に繁栄したいのが絶えざる願望である』と書いています。いかにも脱俗の味があって、私も感銘しました。そんな彼も、自分の実父母のことを聞いておきたかったとも書いています。でも、養父母がその件については話したがいらないと知ると、無理に聞こうとはせず、1985年6月にはその波瀾の生涯の幕を閉じました。85歳でした。

一矢掛弓雄

隅田川神社の境内には、味わい深い石碑が数多くありますが、「隅田川八景」の歌碑は、中でも私が皆さんにお勧めしたい石碑です。東久世通禧——幕末の公卿、明治政府初期の外交に尽す。貴族院及び枢密院の各副議長。能書家——この通禧の書いた「花香月影」の題額の書の美しさに、まず心を惹かれます。そして弓雄の詠んだ8首の歌が、往時の隅田川を中心としたこのあたりの美しい風景をしみじみと偲ばせてくれます。



歌碑（隅田川神社）

その八景の歌は、次の8首です。

浮島の秋月

すみだ川 すみてさやけき 月見れば

世の浮島も 名のみなりけり

関屋の夜雨

荒れはてし 関谷の松の 夜の雨の

古き名のみぞ 世に聞えける

鐘淵の晴嵐

沈みたる 名も世にひびく 鐘が淵

波たちさわぎ あらしふくなり

(註) 晴嵐＝強い風

綾瀬の帰帆

舟人の 心ものりて 夕かぜに

綾瀬わたりは 真帆つづくなり

(註) 真帆＝風をいっばいに受けた帆

長堤の夕照

富士がねに 夕日うすれて すみだ川

長き堤を いそぐ里人

外田の落雁

隅田川 外田の霧の おちかたに

落つる雁の 声聞ゆなり

(註) 落雁Ⅱ空から地におりようとする雁の列

梅若の暮雪

古塚は 有りや無しやと たどるまで

埋もれにけり 雪の夕ぐれ

村寺の晚鐘

里中の 森にこもれる 古寺の

さびしさつくる 入相いりあいの鐘

(註) 入相Ⅱ夕ぐれ

さて、何々八景という考え方は、中国から渡ってきたものですが、我が国では琵琶湖を中心とした景勝の地が、最初の八景に選ばれました。紀元1500年頃に近衛政家の選とも伝えられています。三井晚鐘、石山秋月、堅田落雁、粟津晴嵐、矢橋帰帆、比良暮雪、唐崎夜雨、勢田夕照の八景です。こうしてみると、ほとんど選び方が共通しているように思えます。

なお、浮世絵師の広重は、天保8年(1837)に風景版画「隅田川八景」を出版していますが、その八景は次の通りです。

今戸の夕照、渡場の落雁、吾妻橋の帰帆、真乳山の晴嵐、金龍山の晚鐘、真崎の夜雨、木母寺の秋月、三囲の暮雪の八景です。矢掛の八景よりも、選んだ場所が少し広いようです。なお蛇足ながら、真乳山は桜橋の対岸の丘の上に見える朱塗りの社殿が美しい聖天さまで、金龍山とは浅草の観音さまで。

さて、矢掛弓雄とはどのような人物でしょうか。彼は幕末に岡山県に生まれたことは確かですが、残念ながら年月は不詳です。ただ、弘化2年(1845)正月から嘉永元年(1848)12月までの4年間、父、矢掛正典について学んだことが判っているので、彼の生年は、天保の中頃ではないかと思われます。いずれにしても、幕末激動の時代に生育しているわけです。

彼が、いつ頃から隅田川神社の神官となったかも、現神社に記録がなく不明です。しかし、明治3年から社地において、家塾「墨水園」——後の私学「矢掛学校」——を開校していることから、少なくとも明治初年には、隅田川神社の神官であったと考えられます。なお、明治25年には「隅田川叢書」を刊行しています。

一読したいと思っておりますが、筆者自身病臥する身となり、目的を達しておりません。

一 いま

井

栄 しげる

「歳時記」ということは、年輩の方とはともかく、若い方々には、もしかしたら余り耳なれない言葉だと思ひますので、国語辞典に書かれていることを、次に引用してみました。



白鬚神社

① 一年中の行事とそれにまつわる生活などを書いた本

② 俳句の季語と例句がのせてある本

(註) 季語とは、季節を表わすことば、例えば月は秋の季語、千鳥は冬の季語です。

さて、「墨東歳時記」は今井栄の筆になる①の方の歳時記です。彼は白鬚神社(東向島三丁目所在)の宮司でした。白鬚神社といえ、天曆5年(951)創建の名社で、隅田川七福神の中、寿老神(註・この神に限って寿老人とは書かない)として、江戸の頃から信仰されてきました。しかも、社殿は元治元年(1864)建立と伝えられ、いやが上にも人々の信仰を集めてきました。もっとも、社殿の方は過日、過激派によって放火され、全焼してしまうという災厄にあいました。さて、今井栄は明治34年1月1日にこの地に生まれ、昭和36年7月24日に歿しました。したがって、彼のことをよくご存知の方も少なくないと思います。今更、私などが彼についてとやかくご紹介するのもはばかれるので、この辺で筆を置き、その著書「墨東歳時記」について少しふれたいと思います。

「序にかえて」という巻頭の文章を読んだ時に、私

はこの歳時記に大変魅力を感じました。たとえば、こんなことが書かれています。

『私どもの育った時代は、学校でものを教わると同時に、家で明け暮れにしつけられた。私は自分が年を取るにつれて、親や祖母の口を通して、私の耳に吹きこまれた日常のしつけを有難い賜物と考えるようになった。日常の立居振舞いから言葉使いの端くれに至る、ほんのささいなことにも、親や祖母の温かい眼が届いていたことを知って、私は私を育ててくれた親や祖母に感謝すると同時に——略——』

彼が教員をしていた時の経験から、こうも書いています。

『私は昼食の弁当をつかう時、子供らのはしの持ちかたに、ふと自分の注意を向けたのである。はしの持ちかたには、昔から正しい持ちかたというものが伝えられている。私は正しい持ちかたではしを持つている子と、変則な持ちかたではしを持つている子とを比較調査してみることを思いついた。——中略——その時に得た結論は、正しくはしを持つほどの子は、親たちの眼が温かく見守っていると、その子も穏やかな性質であるということであった。子供が始めてはし

を持つ年齢になった時、ともすれば変則な持ちかたに崩れたがるのを、根気よく直すほどの親は、誠実で思いやりが深い。親に教えられた通りに、自分のはしの持ちかたを正しく改めるほどの子は、わがままな所がなく清純である。——略——』

何か教育論のようであり、歳時記と無縁のように思えますが、私は今井栄の考え方とか、人柄の根底が読みとれるように思え、こうした人の著書ならば、一読の価値ありと思いました。私は墨田区に住んだことはありませんが、墨東地域には深い関心と愛着を持っていたので、この歳時記に強く惹かれました。もともと神田育ちで、菩提寺が本所の本久寺ですから。

私が子どもの頃は、正月は威勢のいい獅子舞のおはやしや、恵方えほう万歳の鼓の音であけたものです。こうした私にとって、墨東の一年間のさまざまな行事や生活習慣、それも文化・文政以降、明治・大正へかけての江戸っ子の心意気を示すような、生き生きとした内容に魅力を感じました。「迎春の準備」という題目に始まって「枯野」に終わる52項目にわたるこの歳時記の内容は、多彩で豊富、同時に大変読み易くなっています。墨東を愛する方に一読をおすすめします。

筆者のことば

「続すみだゆかりの人々」をお届けすることができて、ホッとしました。回を重ねるに従って、調査が困難であったり、素人の私には資料が乏しかったり、皆さんに満足していただけるような内容には、ほど遠いものになりがちでした。それに5月下旬には予測もしなかった病気に倒れ、執筆するなど考えられぬ状態でした。

8月末には退院することができ体調をはかりながら一日2時間位、執筆に励みました。そういうわけで、不本意な出来ばえになったことを厚くお詫び申し上げます。

元 墨田区文化財調査員

水谷 五郎

続
すみだゆかりの人々

発行平成4年3月31日

編集発行 墨田区教育委員会社会教育課

墨田区吾妻橋1-23-20

△(5608) 6309

印刷所 合同印刷株式会社

墨田区業平2-9-13

△(3624) 6111

墨田区立あずま図書館

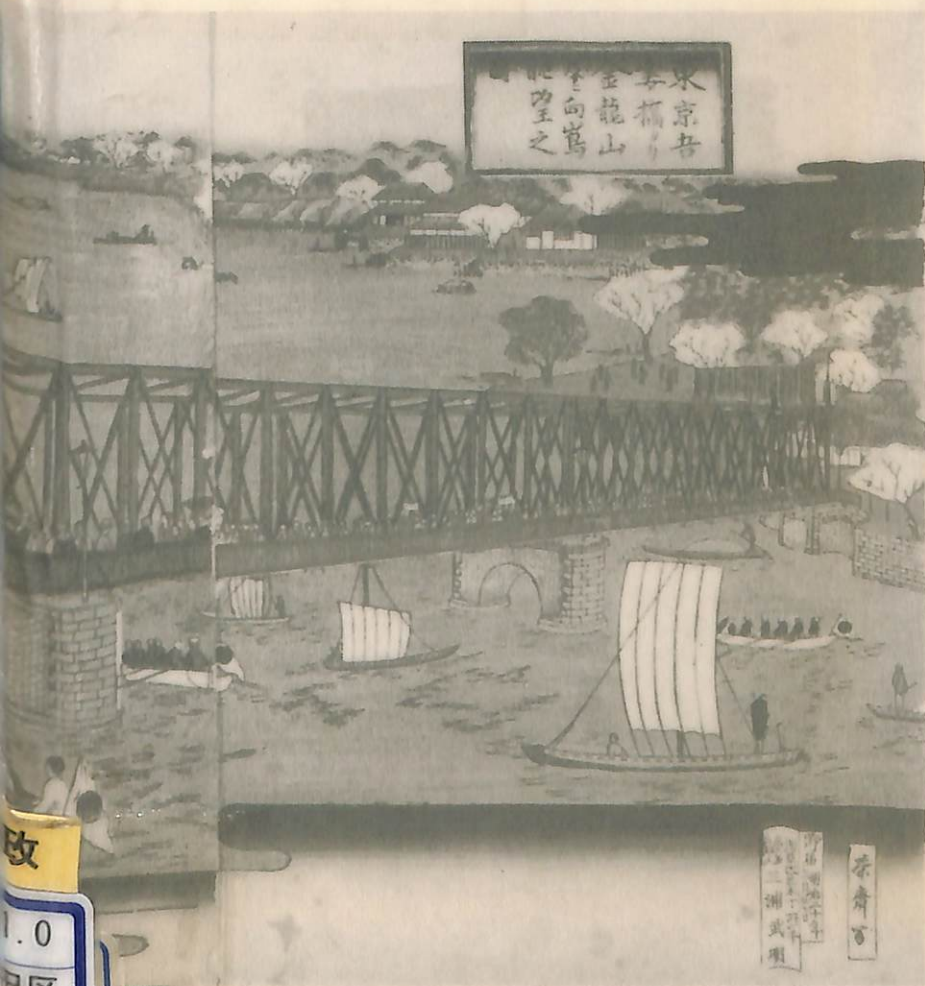
〒131 墨田区文花1丁目19番1号

TEL 612-6048・6072

墨田区立あすま図書館
(03)3612-6048



31127326



政

1.0

日区

7

0
区